『資本論』の社会主義像（中）

――国家社会主義か，市場社会主義か，協同社会主義か――

小　松　善　雄

Ⅰ．はじめに―レーニン，スターリン／鄧小平，ゴルバチョフ vs マルクス
Ⅱ．先行社会主義思想家の系譜
　1　言及の概観
　2　本源的蓄積期の先行社会主義思想家
　　［トマス・モア］［ジョン・ベラーズ］［マブリ］　(第59巻第２号)
Ⅲ．フランスの先行社会主義思想家
　　［サン＝シモンおよびアンファンタン］［ペクール］［フーリエ］［オーギュスト・ブランキ］
　　［プルードン］　(以上，本号)
Ⅳ．イギリスの先行社会主義思想家
　　［ホジスキン］［レイヴンストーン］［ロバート・オウエン］［トムソン］［グレイ］［ブレイ］
　　［ウォッツ］

Ⅲ．フランスの先行社会主義思想家

さて，フランスでは1789年のフランス革命後のナポレオン戦争のもとでの大陸封鎖期に産業革命が始動しつつあるなか，イギリスの産業革命の轍を踏まないオルタナティヴの探求のなかからフランス革命のスローガン――「自由」・「平等」・「友愛」を形式的・政治的権利にとどめず，実質的・経済的・社会的権利として貫徹させることを追及することによって近代社会主義の淵原の一つとなった思想家たちが群生する[8)]。そこで次にそれらの思想家たちに対するマル

８）フランスは近代社会主義の淵原の国であるだけに，現在でもフランス国民は社会主義を肯定的にとらえる民衆が過半数を越えている。2005年11月８日付の『しんぶん赤旗』によれば「フランス　社会主義肯定51％,資本主義肯定33％」という見出しのもとで LH2の世論調査結果を以下のように報じている。

「【パリ＝浅田信幸】フランス人の51％は社会主義を肯定的にとらえ，資本主義を肯定的に見る人は33％にすぎないという世論調査結果が四日，公表されました。仏紙リベラシオンが報じました。

それによると，社会主義，資本主義を否定的にとらえる人は，それぞれ42％，61％。資本主義を『人による人の搾取』と考える人は41％にのぼり，少数者による『富の蓄積』と見る人は45％に達します。同紙は『フランス人に人気のない資本主義』と伝えました。

この調査結果に労働総同盟（CGT）のデュイグ全国書記は，『フランス人は，言われる以上に現実

クスの評価をみてみよう。

[サン＝シモンおよびアンファンタン]

まずサン＝シモンであるが，『資本論』では第Ⅲ部第５篇「利子生み資本」第36章「資本主義以前（の状態)」においてサン＝シモン派の「銀行＝信用幻想」，クレディ・モビリエの創設と関連して言及されている。そこでいまサン＝シモンとサン＝シモン派の特徴づけを与えている当該のパラグラフを引用しておこう。

「イギリスにおける近代的信用制度の形成に理論的に随伴し，それを促進している右の諸著作〔「17世紀の最後の３分の１期と18世紀初頭とのイギリスにおける銀行制度に関するすべての著作」(Ⅲb，1062ページ）――引用者〕の実際的内容に即してみれば，そこにあるのは，利子生み資本，一般に貸付可能な生産諸手段を資本主義的生産様式の諸条件の一つとしてこの生産様式に従属させようとする要求以外のなにものでもないであろう。もし言葉使いだけに即してみれば，サン＝シモン派の人たちの銀行＝信用諸幻想（Bank-und kredit illusionen）と表現にいたるまで一致していることに，しばしば驚かされるであろう。

重農主義者たちの場合には，“耕作者”が，現実に土地を耕作するものを意味しないで，大借地農場経営者を意味するのとまったく同様に，サン＝シモンの場合には，そしてまた彼の信奉者たちの場合にはいまなお一貫してそうであるが，“勤労者”(travailleur）が労働者を意味しないで，産業資本家および商業資本家を意味する。『勤労者は，助手，補助者，肉体労働者[*ouvriers*。強調はマルクス］を必要とする。彼は，知性をそなえた，熟練した，献身的な者たちを求める。彼はこれらの者たちを働かせる。そして彼らの仕事は生産的である』([アンファンタン]『サン＝シモン派の宗教。経済学と政治学』，パリ，1831年，104ページ)。およそ忘れてはならないのは，サン＝シモンがその最後の著作『新キリスト教』[1825年。森博編訳『サン＝シモン著作集』第５巻，恒星社厚生閣，所収］のなかで，ようやく直接に労働者階級の代弁者として登場し，この階級の解放を彼の努力の究極目的であると宣言している，ということである。彼のそれ以前の諸著作はみな，実際上，封建社会に比べての近代ブルジョア社会の賛美，または，ナポレオン時代の将帥たちと法律製造屋たちに比べての産業家たちと銀行家たちとの賛美にすぎない。オーウェンの同時代の諸著作と比べてなんという違いであろう！(24)。先の引用文がすでに示しているように，サン＝シモンの後継者たちの場合にも，産業資本家は相変わらず“とりわけ優れた勤労者”“travailleur par encellence”である。彼らの著作を批判的に読めば，彼らの信用＝銀行の夢（kredit-und Bankträume）を実現したものが，元サ

を直視している。不平等が資本の運動によって生み出され，社会における労働の位置こそが問題の鍵だという認識を持っている』と同紙に語っています。

調査は，世論調査機関 LH2が10月28，29日，1004人を対象に実施しました」。

ここではフランス人の民衆がいかなる社会主義像を抱いているか明らかでないが，それでも21世紀の経済社会システムの向うところを洞見するさい示唆に富むといえよう。

ン＝シモン派のエミール・ペレールによって創設されたクレディ・モビリエ*1であったことには驚ろかないであろう。ともかくこれは，信用制度も大工業も近代的な水準にまで発展していなかったフランスのような国においてのみ有力なものとなりえた形態である。イギリスとアメリカでは，このようなものは不可能であった。――『サン＝シモンの学説。解義。第１年，1828-1829年』第３版，パリ，1831年*2［野池洋行訳，バザール9）ほか『サン＝シモン主義宣言――サン＝シモンの学説・解義．第１年度，1828-1829』，木鐸社］，の次の個所のなかに，すでにクレディ・モビリエへの萌芽が潜んでいる。もちろん，銀行家は，資本家と個人高利貸しよりも安く前貸しすることができる。したがってこれらの銀行家には『とかく借り手の選択を誤りがちな地主たちと資本家たちがなしうるよりもはるかに安く，すなわちもっと低い利子で，産業家たちのために諸手段を調達させることが可能』（202ページ［同前訳，116ページ］）である。ところが，著者たちは，みずから注のなかに，こう付け加える――『無為の者たち*3と“勤労者たち”とのあいだの銀行家の媒介から生じるはずの利益は，われわれの無秩序な社会が詐欺とぺてんのさまざまな形態のもとで顕著になる利己主義に対して提供する機会によって，しばしば相殺され失われさえする。銀行家たちは，しばしば“勤労者たち”と無為の者たちとのあいだに割り込んできて，社会［全体］の犠牲において両者を搾取する』［同前訳，126ページ］と。ここでは，“勤労者”は“産業資本家”を表わす。ともかく近代的銀行制度が自由に使えるこの資金をたんに無為の者［貸し手］たちの資金であるとみなすのは，誤りである。第一に，その資金は，資本のうち，産業家たちと商人たちが貨幣準備またはこれから投下する資本として，一時的に貨幣形態で遊休させている部分である。したがって無為の資本であるが，しかし無為の者たちの資本ではない。第二に，それは，すべての人びとの収入および貯蓄のうち，恒久的または一時的に蓄積に向けられることになっている部分である。そして両者とも，銀行制度の性格にとって本質的なものである。

＊１［フランスの銀行家エミール・ペレールと弟のイザーク・ペレールが1852年に創設した株式銀行で，同行は自行の株式発行によって調達した資金で他企業の株式を買い入れ，２倍の架空資本をつくりあげ，ヨーロッパの鉄道建設ほか多くの事業を営み，ナポレオン３世の支持を受けたが，その目的は投

9）バザールについて前記「人名索引」によってみると，バザールへの関説は『ドイツ・イデオロギー』第２巻のマルクスが執筆した「Ⅳ カール・グリュン『フランスおよびベルギーにおける社会運動（ダルムシュタット，1845年）あるいは真正社会主義の歴史的叙述』の「サン＝シモン主義」の項でのみ言及がみられる。バザールへの言及も後述のアンファンタンへの言及と同様，グリュンのお粗末さとの関連で登場するのではあるが，「バザール時代」と「メニルモンタン時代」の区別への言及には注意すべきものが含まれている。すなわち「サン＝シモンの死から７月革命までの時代」が「サン＝シモン主義の最も重要な理論的発展を含む時代」（548ページ）とされ，バザール時代――「サン＝シモンの死から最初の分裂にいたるまでの時代」（552ページ）に主としてバザールの講演からなる『サン＝シモンの学説・解義．第１年　1828-1829年』がその成果とみなされている。こうしたところからすると，バザールが師のサン＝シモンと同様の欠陥をもちつつもサン＝シモン主義のもっとも重要な理論的発展に貢献した者とされているとみなしうる。

機による利益にあり，その際限のない投機と株式取引によって危機におちいり，1867年に破産した。マルクスは，とくに『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』への諸論説においてクレディ・モビリエのぺてんを暴露した（邦訳『全集』第12巻，20-36，190-197，224-225，274-277，413ページ)。なおマルクスは，イザーク・ペレールについては，本訳書第３巻，766ページで言及している]

＊２［本書は，サン＝シモンの死後，1828年12月から1829年８月にかけて行われた，バザール，ロドリーグ，アンファンタンらサン＝シモン派による17回の集会講演にもとづくもので，マルクスによる次出の引用は，本書中の，第７回集会でのバザールの講演『所有の構成――銀行の組織』からとられている]

＊３［アンファンタン『流通について』，1826年，などの分類（生産者と非生産者，勤労者と無為の者，借り手と貸し手）から見て，貴族や地主等の不生産階級をさすと思われる]

＊４［ナポレオン３世治下のサン＝シモン派の存在（プルードンやペレール兄弟）については，邦訳『全集』，第12巻，26ページ参照]」(IIIb，1064-1067ページ)。

ここで云われていることは，第１に，サン＝シモンの場合，「勤労者」は直接労働者を意味しないで，産業資本家・産業資本家を意味していること，そしてサン＝シモン没後のサン＝シモン派にあっても一貫してそうであることである。

ちなみにマルクスはすでに『ドイツ・イデオロギー』第２巻「ドイツ社会主義――それのさまざまな予言者たちにおける――の批判」の「Ⅳ　カール・グリュン『フランスおよびベルギーにおける社会運動』（ダルムシュタット，1845年)，あるいは真正社会主義の歴史的記述」の「サン＝シモン主義」の項でサン＝シモンの階級把握の曖昧性についてたびたび注意を喚起している。すなわちその項の「１『同時代人にあてたジュネーヴの一住民の手紙』」の一節では「サン＝シモンは寄付を募るために全人類に呼びかけているが，彼の見るところでは，人類は現に３つの階級に分かれている。その３つの階級とは，[…]（１）学者たち［savants］と芸術家たち［artistes］および自由主義的観念をもったすべての人びと，（２）革新の反対者たち，すなわち第１の階級に組していないかぎりでの所有者たち［propriétaires]，（３）平等という言葉で結集する爾余の人類［surplus de l'humanité qui se rallie au mot：*Égalité*］である。この３つの階級が，すべての人びと［tout le monde］をかたちづくるのである。サン＝シモン，『手紙』21，22ページ参照」(③，541-542ページ)。

また「２　『産業者の政治的問答書』」においても，以下のように述べられている。

「『問答書』においては３つの階級，つまり封建的，中間的，および産業的階級［classes féodale, intermédiaire et industrielle］への区分がみられる。[…] サン＝シモンの1817年の『産業』[„L'industrie"] という著作の冒頭にはすでに『すべては産業によって，すべては産業のために』[„Tout par I'industrie, tout pour elle"] という標語が見いだされる。[…] サン＝シモンの場合，産業者に属するのは労働者たちのほかに工場主たち［fabricants］や商人たち［négociants]，要するに全産業資本家たちもそうなのであるばかりでなく，彼はとくに後者に話しかけさえするのである」(③，544，546ページ)。

そしてこの階級把握の曖昧性はアンファンタンの『サン＝シモン派の宗教。経済学の政治学』，

サン＝シモンの学説を社会主義の方向に展開させたとされるバザールらの『サン＝シモンの学説・解義。第１年度，1828-1829年』でも継受されているというのである。

第２は，サン＝シモンに対し，その最後の著作『新キリスト教』(1835年）に到って「ようやく直接に労働者階級の代弁者として登場し，この階級の解放を彼の努力の究極目的であると宣言している」とみなし，「それ以前の諸著作はみな，実際上，封建社会に比べての近代ブルジョア社会の賛美，または，ナポレオン時代の将帥たちと法律製造屋たちに比べての産業家たちと銀行家たちとの賛美にすぎない」ときわめて低い評価を与えていることである。ここで触れておかなければならないのは，この「彼（サン＝シモン）のそれ以前の諸著作はみな，実際上，封建社会に比べての近代ブルジョア社会の賛美，または，ナポレオン時代の将帥たちと法律製造屋たちに比べての産業家たちと銀行家たちとの賛美にすぎない。オウエンの同時代の諸著作と比べてなんという違いであろう！」という一文にエンゲルスが（注24）を付して以下のように述べていることである。

「(24) マルクスが，もし草稿に手を加えたとすれば，きっとこの個所をいちじるしく修正したことであろう。この個所は，フランスにおける第二帝政下の元サン＝シモン派の人たちの役割に示唆を受けた個所であり，マルクスが右の個所を書いていたちょうどそのとき，同派の救世的な信用幻想が，歴史の皮肉によって，前代未聞の規模のいかさまという形で実現したのである。のちには，マルクスはもっぱら感嘆を込めて，サン＝シモンの天才と百科全書的頭脳について語った。サン－シモンが彼の初期の諸著作において，ブルジョアジーとフランスでやっと発生しかかっていたプロレタリアートとの対立を無視したとしても，また彼が，ブルジョアジーのうち生産にたずさわる部分を“勤労者”に数えたとしても，それは，資本と労働とを融和させようとしたフーリエの見解に照応するのであり，当時のフランスの経済的および政治的状態から説明がつくのである。この点では，オウエンの視野のほうが広かったとすれば，それは彼が別な環境に，すなわち産業革命とすでに激しく尖鋭化していた階級対立との真っただ中に生活していたからである。――Ｆ・エンゲルス」(Ⅲb，1066ページ)。

たしかにマルクスの言――『新キリスト教』以前の諸著作はみな「実際上，近代ブルジョア社会の賛成，または，産業家たちと銀行家たちとの賛美にすぎない」という叙述はやや行き過ぎであるといえる。というのはマルクスは前出の『ドイツ・イデオロギー』第２巻の「Ⅳ カール・グリュン『フランスおよびベルギーにおける社会運動』(ダルムシュタット，1845年)，あるいは真正社会主義の歴史的叙述」の「サン＝シモン主義」の項において，こう述べているからである。

「サン＝シモンはまったく，彼の社会主義的な基本的見解との連関において，科学が学者たちの人格と日常の生活における彼らの態度とに及ぼす影響を知ろうと欲した。グリュン氏にあっては，これが一つの無意味な，漠とした，小説めいた思いつきに変わるのである」(③，538ページ)。

すなわちマルクスは『新キリスト教』以前においてもサン＝シモンを「社会主義的な基本的見解」の持ち主とみなしているのである。

しかしそうだとしても『資本論』段階におけるマルクスのサン＝シモン理解の否定的基調は看過されてはならないであろう。

第１，第２の特徴づけは，帰するところ，フランスが「信用制度も大工業も近代的な水準にまで発展していなかった国」であることに起因するのであるが，そうであったがゆえに，さらに「17世紀最後の３分の１期と18世紀初頭のイギリスにおける銀行制度に関するすべての著作」にみられる「幻想」と類比するサン＝シモン派の「銀行＝信用諸幻想」を実現したクレディ・モビリエに対しマルクスは，それがイギリスの諸著作と「幻想」は共にしても，産業資本家・商業資本家の償却ファンド・蓄積ファンドおよびすべての人びとの収入・貯蓄のうち恒久的・一時的に蓄積に向けられるファンドをもって成り立っている近代信用制度が未確立なもとでの仇花とみていることも付け加えておいてよいであろう。となると，サン＝シモンをはたして空想的社会主義者として規定しうるがどうかも問われかねないことにもなろう。

もっとも他面では，マルクスはサン＝シモン派の信用制度把握について評価を与えてもいる。すなわち同じ第31章「貨幣資本と現実資本 Ⅱ」で，こうもいわれている。

「最後に，資本主義生産様式から結合（アソツイールテ）された労働の生産様式（Produktionsweise der assoziierten Arbeit）*1への移行の時期に，信用制度が有力な槓杆（てこ）として役立つであろうことは，何の疑いもない。とはいえ，それはただ，生産様式自体の他の大きな有機的諸変革と連関する一要素としてでしかない。これに反して，社会主義的意味での信用制度・銀行制度の奇跡的な力についての諸幻想（Illusionen über die wunderwirkende Macht des kredit-und Bankwesens, im sozialistischen Sinn）は，資本主義的生産様式とその諸形態の一つである信用制度とに関する完全な無知から生じる。生産諸手段が資本に転化することを止めるやいなや（このことのうちには私的土地所有の止揚も含まれている），信用そのものはもはや何の意味ももたないのであり，ともかくこのことは，サン＝シモン主義者たちでさえ見抜いていたのである。他方，資本主義的生産様式が存続する限り，その諸形態の一つである利子生み資本も存続し，そして実際上，その信用制度の基盤を形成する。商品生産は存続させておいて貨幣を廃棄しようと欲した同じ人気取りの著述家プルードンだけが，“無償信用”という化物を，すなわちこの小市民的立場の信心深い欲求の実現と称するものを夢想することができたのである。

＊１［『結合された労働の生産様式』は，草稿では，いったん『全般的かつ直接に結合された労働の結合された生産様式』と書かれたあと，本文のように訂正されている］

『サン＝シモン派の宗教。経済学と政治学』［アンファンタン著，パリ，1831年］の45ページでは，こういわれている。――『信用の目的とするところは，一方の人びとは産業の諸手段を所有しながらそれらを使用する能力または意思がなく，他方の勤勉な人びとは何らの労働諸手段も所有しないような一社会において，これらの手段をできる限りたやすい方法で，前者すな

わちその所有者の手から，その使用法を心得ている他方の人びとの手に移転させることである。この定義によれば，信用とは，それによって所有を成り立たせるやり方の一結果であるということに注目されたい』と。したがって，信用はこの所有の成り立ちとともに消滅することになる。さらに98ページで次のように言う――こんにちの諸銀行は『諸銀行の外部で行われる諸取引が押しつける運動――みずからが生み出す運動ではない――に従うことを運命づけられているものと考えている。言い換えれば，諸銀行は，それらが資本を前貸しする相手の“勤労者たち”にたいして資本家の役割を果たす』と。諸銀行はみずから指揮をとるべきであり『銀行が融資した企業および銀行が起こした事業の数と有益性とで』（101ページ）頭角を現わすべきであるという考えのうちには，クレディ・モビリエが潜んでいる」（同，1068–1071ページ）。

ちなみにアンファンタン[10]とクレディ・モビリエとの関係への言及で注目されるべきは，

10）前記「人名索引」によるとアンファンタンへの言及は18件あり，かなりの件数である。そのうちまず挙げられるべきはマルクスが共産主義思想の本格的な研究宣言を述べた『ライン新聞』の論説「共産主義とアウグスブルク『アルゲマイネ・ツァトウング』」（1841年10月16日付）での言及であろう。関連部分は次のものである。

「アウグスブルク紙は，共産主義思想の『現実性』をプラトンのもとに見いださずに，同紙の知っているある無名氏のもとに見いだしているが，われわれはこの点で同紙と意見を異にするだけに，なおさら真剣に前記の理論的著作（ルルーやコンシデランの著書，とりわけプルードンの明敏な労作のような著書―引用者）をとりあげなければならない。この無名氏というのは，殊勝なことに，その当時彼のもちあわせていた全私財を科学的研究の若干の分野に投じていくらかの功績をあげ，父アンファンタンの意思に従って，その僚友たちの皿や長靴をみがいたという人である。われわれは，共産主義的思想の実践的な試みではなく，その理論的な論述こそ本来の危険をなすということを固く確信している」（①，125ページ）。

主旨はアウグスブルク紙は共産主義思想の「現実性」を「プラトン」のもとにではなく，「父アンファンタンの意思に従って，その僚友たちの皿や長靴をみがいたという」「無名氏」のもとに見い出しているが，この点，「同紙と意見を異にする」とし，パリ郊外のメニルモンタンにあるアンファンタンの自宅での実践的な試み――すなわちアンファンタンを「第二のメシア」として神格化し，「汎神論的な魂の連続的蘇生論」にたつドクマ化された女性解放が「肉体の復権」論と結合して「組織の第一目標」とされる（見市雅俊「サン＝シモン主義の社会観と実践――正統的サン＝シモン主義者アンファンタン――」『思想』1976年２月号，70ページ）労働共同体という宗教的セクトを拒斥し「ルルーやコンシデランの著書，とりわけプルードンの明敏な労作」のような「理論的著作」の長期にわたる深遠な研究にもとづく「批判」にたった「理論的な論述」こそがなされなければならないとしたものである。したがってマルクスにあっては，共産主義思想の研究の出発時点でアンファンタンの実践は否定されていたのである。

『ドイツ・イデオロギー』では第２巻の「Ⅳ カール・グリュン『フランスおよびベルギーにおける社会運動』（ダルムシュタット，1845年）……」ではグリュンが「個々の社会主義的著作家を原典によって正しくかつ完全に叙述」するという「まことに最低の要求」（534ページ）を充たしていないことを「サン＝シモン主義」の項で実証するさい，アンファンタンの氏名が８件引き合いに出されているが，そのすべてはグリュンが「サン＝シモン主義者の全文献のうち，ただの一冊も手にしたことがなかった」（同）こと，そのためロレンツ・シュタインの『現代フランス社会主義および共産主義，現代史への一寄与』（1842年），レ・レボーの『改革者あるいは近代社会主義者についての研究』（1843

『トリビューン』論説――「フランスのクレディ・モビリエ（第二論説）」(『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』，1856年６月24日付）であろう。ここでは，「強奪者」としてと同時に，「すべての階級の家父長的な恩恵者」として「登場」(⑫，26ページ）せざるをえなかったルイ・ボナパルト＝ナポレオン３世が直面した経済的問題の解決を「信用」に求めたことに関連して以下の解説が施されている。

「ボナパルトの過去におけるいっさいのさまざまな経験は，かつて彼にもっとも困難な経済状態を乗りきらせた一つの偉大な財源を指示した――すなわち，信用。しかも，フランスにはたまたまサン＝シモン学派が存在しており，彼らは，その出現当時にも，またその衰退時にも，なにか新奇な公的信用計画によって普遍的な富を創出すればいっさいの階級的敵対関係は解消するにちがいないという夢想を信じこんでいた。そして，この形態でのサン＝シモン主義はクーデタの時期にはまだ死滅してはいなかった。[…] さらに，二人のポルトガル系のユダヤ人もいて，彼らは実際に株式取引とロートシルドに関係をもち，教父アンファンタンの足下に跪いたことがあり，その実際の経験にもとづき社会主義の背後に株式取引を，サン＝シモンの背後にローを嗅ぎつける大胆さをもっていた。この二人の人物――つまり，エミル・ペレールとイサーク・ペレール――がクレディ・モビリエの創設者であり，ボナパルト的社会主義の元祖であった」(⑫，26ページ)。

一読してここでのサン＝シモン主義への評価は，如上で取り上げている『資本論』第３部第５篇第36章と同様な理解の原型がみられることが知られよう。こうみてくると，『資本論』のサン＝シモン派評価は「クレディ・モビリエ」論説の基調を継承しているといえる。

そこで上記の『資本論』の引用であるが，この論述でまず注意を要するのは，２つの「幻想」――すなわち「サン＝シモン派の銀行・信用幻想」＝「信用＝銀行夢想」と「社会主義的意味での信用制度・銀行制度の奇跡的な力についての諸幻想」の位相の相違である。というのは，サン＝シモン派の「銀行・信用幻想」＝「信用＝銀行夢想」というのは「17世紀の最後の３分

年）を利用したものの，年代的順序の無視，思想内容の取り違えを文学的手練手品で再構成していることの暴露にさいして現われているので細かい言及は省略したい。

本文でのトリビューン論説「フランスのクレディ・モビリエ（第一論説）」での言及に加え見逃せないのは同じトリビューン論説「フランスとイギリスのあいだの新条約」(1860年２月14日付）である。ここではイギリス‐フランス通商条約の締結にさいしてペール・アンファンタンの果たした役割がリークされている。

「かつてサン＝シモン主義の司祭長であったペール（Père）・アンファンタンがフランス側の主役であったことは，新聞には知られていない。ペール・アンファンタンからイザーク・ペレールとミシェル・シュヴァリエにいたるまでの，こうしたサン＝シモン主義者たちが第二帝政の経済的な支柱に変えられていったのは，じつに不思議ではないか」(⑮，13ページ)。

マルクスがいかにサン＝シモン派への情報に通じていたかがうかがえよう。

ちなみにアンファンタンの“ペール・アンファンタン”という通称は，「フランス語では『とっちゃん坊や』という意味でもある」(㉛，注解［224］，551ページ)。

の１期と18世紀初頭とのイギリスにおける銀行制度に関するすべての著作」のうちに見られる「信用や貴金属の独占の廃止や奇跡の発揮，紙券による貴金属の代位，等に関する途方もない幻想」(同，1062ページ）と同内容の幻想であるのに対し，「社会主義的意味での信用制度・銀行制度の奇跡的な力についての諸幻想」は行文からうかがわれるように，直接的にはプルードンの「無償信用」についての幻想を指しているからである。したがってマルクスはプルードンが「信用制度に関する完全な無知」を暴露しているのに対し，少しともアンファンタンは，社会主義のもとで土地をも含む生産諸手段の所有が揚棄され資本に転化することがなくなれば，「信用は何の意味をもたない」ことを知っていたとする。すなわち信用は貨幣資本家の手から現実資本家への資本としての貨幣の貸借を媒介し，現実資本家はそれによって「所有を成り立たせる」が，所有の成り立ち如何では消滅することを認識していたというのである。のみならずアンファンタンは銀行が現実資本の運動に従うよう運命づけられているが，銀行は「勤労者たち」＝現実資本家に対する貨幣資本家として企業への融資，起業への指揮をとり頭角を現わすべきであるという。そしてこの煽り立てのうちにマルクスはサン＝シモン派の「銀行＝信用幻想」にもとづく「クレディ・モビリエ」が潜んでいるというのである。

しかし信用が終局的には現実資本の再生産過程に規定されることを知りつつ，「銀行＝信用幻想」にもとづき，銀行が金融業務――それもクレディ・モビリエにみられる投資銀行業務を極限まで繰り広げるような煽り立てとするとすれば，それは何というべきか。マルクスは同じ第５編第27章「資本主義的生産における信用の役割」の末尾においてローと並んでクレディ・モビリエの共同創立者ペレール兄弟のうちの「イザーク・ペレール」を「ぺてん師」(Schwinder）と呼んでいるが，そうだとすればアンファンタンはまさに「ペテン師」の幇助者以外の何物でもなかったということになろう。

[ペクール]

以上，サン＝シモンとサン＝シモン派のアンファンタンについての言及をみてきたが，ここでさらにサン＝シモン派に属するとされているペクールへのマルクスの言及をみておこう。

ペクールへの言及はサン＝シモン派のなかではもっとも多く，その言及は『資本論』第Ⅰ部，第Ⅲ部の両部にわたる。この点やや異色である[11)]。まず第Ⅰ部ではペクールは第７編第23章第

11）ペクールについての言及は早くは1844年に執筆された『経済学・哲学草稿』において『社会・政治経済学の新理論』からの抜粋がみられる。

最初の抜粋については本文に掲げておいたが，これに続けて同じ第一草稿の「資本の利潤」の「諸資本の蓄積と資本家の競争」において「総じて大きな諸資本の蓄積の場合には，より小さな資本家たちに比べて，固定資本の集中と単一化も割合に起こりがちである。大きな資本家は自分のために労働用具の一種の組織化を実施する」(㊵，411ページ）という資本の集中傾向を問題にした部分でも，かなり長文の抜粋がなされている。

「『“賃金をもらって働くのは奴隷になることの開始であり，労働の材料を金をとって貸すのは自己

１節でのベラーズへの言及の直前に述べられている「資本の蓄積はプロレタリアートの増加である」という命題の例証を示す（注70）において登場する。

「労働力――それは，価値増殖手段として絶えず資本に合体されなければならず，資本からは離れることができず，資本へのその隷属は，それを買う個別資本家の交替によって隠蔽されているにすぎない――の再生産は，実際の資本そのものの再生産の一契機をなす。したがって，

の自由の樹立である。……労働は人間であり，材料は逆におよそ人間的などではない”』ペクール『社会・政治経済学の新理論』411，412ページ。

『“材料という要素はいま一つ労働という要素なしには富の創出のために何の力もないものであるが，それが彼らのために産出力をもつという魔術的な力を得てくる。あたかも彼らが彼ら自身の働きによってこの不可欠な要素をそこへ置きいれでもしたかのように”』前掲書，同ページ。『“一人の労働者の日々の労働が彼に年平均400フランをもたらし，そしてこの額で成人一人ひとりがお粗末な暮らしをするに足ると仮定すれば，利子，地代，家賃等々での2000フランの所有者は皆，それゆえ間接的に５人の人間に自分のために労働を強いているわけであり，財産収入の10万フランは250人の労働，そして100万フランは2500人の労働を意味するわけである”』（したがって３億（ルイ・フィリップ）は75万人の労働者の労働を意味する）前掲書，412，413ページ。

『“有産者たちは人間たちの掟によって，あらゆる労働の材料をどう使ってもよい権利，換言すれば，それを彼らの好き勝手に扱ってよい権利を得た。……彼らには掟によって適時に，そして常時，労働を無産者たちにあてがう義務も，彼らにつねに十分な給料を支払う義務も……まったくない”』413ページ，前掲書。『“生産の種類，量，質，機会，富の使用，消費，あらゆる労働の材料の処分に関する完全な自由。各人は自由に彼の物を，彼自身の個人的利益以外は無視して好き勝手に交換することができる”』413ページ，前掲書。

『“競争は任意の交換をあらわすものに他ならないのであって，このものはそれ自体，あらゆる生産の手段をどう使ってもよいという個人的権利からすぐに出てくる論理的帰結である。一体をなすところのこれらの３つの経済的契機，すなわち，どう使ってもよい権利，交換の自由および思い通りの競争は次のような諸結果をもたらす。誰もが自分の欲するものを，欲するように，欲する時に，欲する所で生産し，うまく生産したり，まずく生産したり，十分すぎるほどに，あるいは不十分に，あまりに早く，あるいはあまりに遅く，あまりに高価に，あるいはあまりに廉価に生産する。誰もが自分が売るかどうか，誰に売るか，どのように売るか，いつ売るか，どこで売るかは知らない。買入れについても同様である。生産者は必要と資源，需要と供給については無知である。彼は自分の欲する時に，できるときに，欲する所で，欲する人に，欲する値段で売る。そして買う場合も同様である。これらすべてにおいて彼はつねに偶然性の玩弄物であり，最も強い者，最も困っていない者，最も富んだ者の掟の奴隷である。……あるところではある財貨の欠乏が存在するのに，他のところには過剰と浪費がある。ある生産者はたくさん売るか，非常に高く売ってでっかく儲けるのに，別の生産者は何一つ売ることがないか，さもなければ損をして売る。……供給は需要のことを知らず，そして需要は供給のことを知らない。君は一般消費者たちのうちにみられる好みや流行を当てにして生産するが，しかし商品を出す用意ができたときにはもう気まぐれな好みは移り去って，他の種類の製品のところへ止まっている。……避けがたい帰結は破産の永存と一般化，見当違い，突然の没落と思いがけぬ幸運，商業危機，操業停止，周期的な供給過剰と品不足，給料と利潤の不安定と低下，苛烈な競争場裡での財貨，時間，精力の喪失あるいはひどい浪費である”』414-416ページ，前掲書」(㊵，412-414ページ)。

この『経済学・哲学草稿』での労働者の社会的・経済的地位についてのペクール抜粋は，『資本論』第１部第７篇第23章の注（70）の内容の解説になっているとみることができよう。

資本の蓄積はプロレタリアートの増加である[70]。

(70) […]『プロレタリア』とは，経済学的には『資本』を生産し増殖し，ペクールが『資本氏』*1と名づけている人物の価値増殖欲求にとって過剰となるやいなや街頭にほうり出される賃労働者を指すものでしかない。

＊1 [ペクール『社会・政治経済学の新理論，または社会組織に関する研究』1842年，第44章第13節，880ページ]」(Ⅰb，1051-1052ページ)。

さてここで一言しておくと，ペクールのこの「プロレタリア」規定はきわめて簡潔に本質点を捉えているが，こうした把握はマルクスにあっては旧知に属するものであって1844年の『経済学・哲学草稿』以来の認識でもある。そこでは第一草稿のうちの「労賃」の部分で「国民経済学は労働者をただ，働くけだもの，ただ口腹の欲しかもたぬ家畜としてでしか知らない」(㊵，397ページ）ことの例証としてペクールの『社会・政治経済学の新理論』からの抜粋がなされている。参照しておこう。

「“それゆえ，生きるために，無産者は直接的にか間接的にかわが身を有産者の用に立てること，換言すれば，彼らに従属することを余儀なくされている”」ペクール『社会・政治経済学の新理論』409ページ。

“奉公人―給金。労働者―賃金。勤人―報酬または給料”。同書409，410ページ。

『“自分の労働を貸す”，“自分の労働を賃料をとって貸す”，“他人にかわって働く”』

『“労働の材料を貸す”，“労働の材料を賃料をとって貸す”，“他人を自分の代わりに働かせる”』同書［411ページ］。

『“この経済の仕組は否応なしに人びとをまことに浅ましい職業につかせ，まことに痛ましくもむごい堕落へおとしめずにはおかないことになるのであって，これに比べれば未開・野蛮の状態も王侯の暮らしに見えるほどである”』同書417，418ページ。『“あらゆる形での無産者の身売り”』421ページ以下。屑拾い」(㊵，399-400ページ)。

ペクールは「プロレタリア」をこのようにみていたのである。

ついで第24章第７節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」における小経営的生産様式の特質把握にかかわっても引照される。

「この（小経営という――引用者）生産様式は，土地やその他の生産手段の分散を想定する。それは，生産手段の集積を排除するのと同じように，同じ生産過程のなかでの協業と分業，自然に対する社会的な支配と規制，社会的生産諸力の自由な発展をも排除する．それは，生産および社会の狭い自然発生的な限界とのみ調和しうる。この生産様式を永遠化しようとするのは，ペクールが正しく言っているように『万人が凡庸であることを命令する*3』ことであろう。

＊3 [ペクール（フランスの経済学者，空想的社会主義者）『社会・政治経済学の新理論……』，パリ，1842年，435ページ参照]」(同，1298-1300ページ)。

これら２つの引用はペクールが小経営的生産様式の限界を踏まえ，資本主義的生産様式，生産関係の基礎をなす「プロレタリアート」について適正な把握をしていることから引き合いに

出されているといえよう。

それゆえ，サン＝シモンならびに他のサン＝シモン派と異なってペクールにあっては“勤労者”という用語でもって資本家とプロレタリアートをくくるのではなく資本家とプロレタリアートの区別と両者の敵対的対立の認識が確立している点は確認しておく価値があろう。

第Ⅲ部では第５篇第36章の先にみたアンファンタンの『サン＝シモン派の宗教。経済学と政治学』からの引用につづいて，以下のように『社会・政治経済学の新理論』から直接の引用がなされている。

「同様にコンスタンタン・ペクールも，諸銀行（サン＝シモン派の人たちが“一般的銀行制度”と名づけるもの）が『生産を支配する』ことを要求する。そもそもペクールは，はるかに急進的（viel radikaler）であるとはいえ，本質的には（wesentlich）サン＝シモン派である。彼は，『信用施設が……国民的生産の全運動を統治する』ことを欲する。――『試みに，単一の国家的信用施設，すなわち才能と業績のある無産者たちに資金を前貸しするが，しかし，これらの借り手たちを生産のおよび消費における密接な関連を通して強制的に互いに結びつけるのではなく，反対に，彼らみずからにその交換とその生産を決定させるような国家的信用施設を創設してみよ。こうした方法によって諸君が達成するであろうものは，こんにちすでに諸個人銀行が達成しているもの，すなわち無政府状態であり，生産と消費との不均衡であり，ある人たちの突然の破滅と他の人たちの突然の致富だけである。したがって，諸君の施設は，ある人たちの背負い込む不幸［原文は『破滅』］と同じだけの幸福［原文は『繁栄』］を他の人たちのために生み出す以上には出ないのであり……ただ，諸君から前貸しを受けて援助される賃労働者たちに対して，こんにち彼らの資本家的雇い主たちが行っているのに類する競争を互いに行うようにする資金を諸君が与えた，ということにすぎないであろう』（ペクール『社会・政治経済学の新理論』，パリ，1842年，433，434ページ）（Ⅲb，1071-1072ページ）。

みられるようにペクールからの引用はすべて主著とされる『社会・政治経済学の新理論』からのものであるが，最後の引用にはやや注釈が必要であろう。まず，この一文の冒頭の「同様に」というのは，すでにみたようにアンファンタンの，銀行が「資本家」――貨幣資本家の役割を果たし，融資・起業の指揮をとり頭角を現わすべきであるという考えと「同様に」ということであるが，これに関してペクールはアンファンタンより「はるかに急進的」であるといわれている。ではなぜペクールはアンファンタンより「はるかに急進的」なのか。その理由は上掲の引用文からうかがわれうる。

それは，ペクールにあっては諸個人銀行がすでにおこなっていることを代位するにすぎないとはいえ，とにかくクレディ・モビリエを超え「単一の国家的信用施設」が賃労働者たちに資金を与え「国民的生産の全運動を統治する」ことを欲するほど徹底性をもっているからである。

しかしそれではなぜ，ペクールは「本質的にはサン＝シモン派」なのか。このマルクスの規定の含意を理解するには，サン＝シモン派とはいかなる社会システム論を保持していたのかを

ひとまず明らかにしておく必要があろう。これについては見市雅俊氏が「T・E・スミスとイギリス労働運動――知られざるオーウェン主義者もしくはサン＝シモン主義者」（京都大学人文学研究所『人文学報』第39号，1975年）で簡明な規定を与えている。

「サン＝シモン主義者は『あるがままの所有』としての私的所有とその直接的否定としての共産主義的所有――la communauté des biens――を共に否認し（*Œuvres de Saint＝Simon & D'Enfantin* (1865–78). Dactrine Œuvres XLI, pp.302–3, 310–1, 440.），国家による全生産手段の所有（Ibid. XLI. pp. 243–4, XLII, p. 164.），および能力に応じた職業配置と仕事に応じた報酬といういわば第三の所有形態を提起した。この能力主義は能力の不均等性，従って不平等な報酬を自明の理とした［『以上の制度を財産の共有で知られる制度と混同する人がいることを我々は覚悟しておくべきだ。しかしながら両者はなんら関係がない。我々はすでに述べたように未来の社会組織では各人はその能力によって配置され，その仕事によって報酬を受ける。それは配分の不平等を十分に意味する。反対に共有制度ではすべての取り分が平等である』（*Ibid.* XLI, p. 237.）］。政治的には同時代の自由主義，７月革命以降はそれに加えて民主主義を批判し，所謂カソリック復古派により強い共感を示しつつ社会と経済の活動へ能動的に介入し，それを指導する強力な中央集権国家を提起した（とくに *Ibid.* XLI, pp. 172–3, 276, 422, XLII, pp. 103, 324–6, 348.）」（91ページ）。

この規定づけは前出のマルクスも通暁しているバザールらの『サン＝シモンの学説。解義』に依拠したものであり，みられるようにサン＝シモン主義は国家社会主義を構想していたといえる。

しかし国家社会主義の構想という点でもバザールやアンファンタンよりペクールは「いっそう急進的」である。というのも上掲のマルクスの引用からも知られるようにペクールは「単一の国家的信用施設」の創設だけに甘んじるのではなく，さらに包括的な社会システム構想を抱懐していたからである。じつはマルクスが引照に用いた『社会・政治経済学の新理論』には，ソ連型社会主義の原型ともいうべき国家社会主義構想の「計画書」が付されている。では，それはいかなるものか。わが国でペクールの学問的発掘をおこなった岩本吉弘氏の「ペクール・ノート――国家社会主義構想の成立過程――」（一橋大学社会科学古典資料センター，シリーズ No.30，1993年）によってその大要をみておこう。まずペクールの国家社会主義構想について岩本氏は，こういう。

「過去のペクール研究者たちの言うには，ペクールは後にソ連で実現されたような生産手段の一元的国家集中を核とする『国家社会主義 socialisme d' État』，『国家集産主義 collectivisme d' État』の最初の体系的主唱者であり，後世その十分な評価，研究がなされないできたのは，不幸な偏見や誤解，研究者の怠慢などによる。その当否はともかく，確かに次にみるように，彼が1840年前後の諸著作で提出した『国民アソシアシオン Association nationale』という未来社会構想は，経済構造の面では，すべての生産手段を一国民全体の社会的所有に変え，人民

主権にもとづいて選挙される代表政府（国家中枢から各地域，各経済部門の末端にまで及ぶ統一的管理機構）が，国民経済全体を，統一性と調和を保って『一つの大工場』(『社会・政治経済学の新理論』，以下『新理論』)，p.702）のように運営するというものであり，確かにかつてソ連が目指した経済像と抜きがたい類似性を持つものだった」(１ページ)。

そして「主著と目される『新理論』の中には『国民的・普遍的アソシアシオン計画，すなわち労働の組織化の道と手段』と題する計画書が挿入されており（『新理論』，pp.699-765)，この構想の経済構造の骨格を簡潔に知ることができる」(同）と指摘し，「以下，その主たる論点を抜き出してみると，それはおよそ次のようなものである」(同）と紹介されている。

「①所有形態

国内のすべての富の源泉，土地と労働用具などの生産手段のすべては，国民全体に属しており分割することのできない『国民的所有 propriété nationale』，『共同所有 propriété commune』とする。つまり小地域や協同組合といった単位で分割されるのではなく，一切の生産手段を国民というレベルで『社会化する socialiser』。

②統治形態

一国は人民主権原理を体現した統治機関，つまり国民の直接投票によって選出される代議制議会および行政府（これは大統領制でも議院内閣制でもよい）のもとに，現在の行政単位(市町村，小郡，郡，県など）に相似した諸『産業区域』に，『位階制的に』つまり中央集権的な上下の秩序をもって分割される。議会は，経済計画の一切，つまり国内の『あらゆる種類の富の生産，流通，分配，消費』を議決し計画化する権能をもつ。各下級区域には，上級への『位階制的従属』のもとで生産に関する自立的な決定権は認められず，当然，上級の決定に異を唱えて調整を求めることはできるが，最終的には管轄区域内でその計画を実行する役割を負う。

③生産計画

一元的な計画経済であるから市場を通過させる調整はありえず，前もって国民の需要と供給を測定して均衡を図らなければならない。そのための手段として，各国民は一定期間内に自分がおこなう予定の消費について，その対象，品質，量などを前もって予約し，それと過去数年間の消費統計とに基づいて国民の総需要を測定する。そしてそれに各産業地域の資源と生産能力を勘案して，国内の各地域に生産計画を配分する。

④国民編成と分配・交換

上記のような体制に対応して，すべての国民は，一国全体で配置転換の可能な，たとえば産業の諸分野，科学，芸術，宗教などの各種『公務員 fonctionnaires』集団に編成される。そして一人当りの職務は，誠実に働けばほぼ同等の労働量になるように前もって法的に区画されていて，それを誠実に果たす限りで全員に平等な給与が与えられる。したがって個人の給与は，大体，同一労働量に分割された職務に対する平等な法定賃金であり（私的売買は存

在しないので貨幣は労働量の表示証のようなものになっている），社会の総生産が増大することによってのみ，平等を保ちつつ増大しうる。また各種財貨の価値（つまり価格）は投下労働量によって測られ，法的の価格表に定められて，国民は自己の給与分とその財貨を交換する。こうしてすべての労働が全一的計画のもとでの社会的総労働の一部としておこなわれ，各自は自己の労働量の分の分配を純粋に労働と労働との交換として受け取ることになる。

⑤一国一工場型社会

簡略には，このような構造のもとで，もはや一国は『一つの巨大な工場』，『巨大な一アトリエ』のようになっている。国民経済の全体が国家の単一の意思のもとに集中され計画的に配置されて，生産と消費の不均衡の要因は存在しなくなる。彼の表現によると『すべての労働用具を「社会化し国有化する socialiser et nationaliser」こと，全市民の活動と生産を例外なく「統一 l'unité」と「政府への集中 la centralization gouvernementale」へとまとめること』（『新理論』，p.675），これによっていままで解決できなかった一切の経済的アナルシーが完全に克服されるのである。一方，国民は自己の給与（つまり自分の労働した量）を好きなように使用でき（もちろん自分の予約を大きく狂わないようにはしつつ），各自の個人的な自由や人格の発展はなんら阻害されない。排除されるものは，資本家的自由，自分の判断で生産や販売を決め生産物や利得を自分だけのものとする自由，つまり分離した生産者に固有の自由のみであり，それ以外の一切の政治的・市民的自由は完全に保証される」（1–3 ページ）。

こうしてみてくると，マルクスがペクールは「本質的にサン＝シモン派である」というとき，サン＝シモン派の国家社会主義構想の継受においても「きわめて急進的」であったという含意も介在していたといえよう。ともあれ，この構想はレーニンが『さし迫る破局』，『国家と革命』などで想定していた国家社会主義＝国家独占社会主義にきわめて近似していることだけは確かである。

しかしマルクスのサン＝シモン学説へのきわめて低い評価を参酌するとき，マルクスはサン＝シモン派の国家社会主義はもとよりペクールの国家社会主義も採るところではなかったと考えられる。それゆえとりあえずいっておくならばマルクスの未来社会構想はまたレーニンの国家社会主義論＝国家独占社会主義論とは同一視されるものではなかったのである。

[フーリエ]

それではフーリエについての評価はどうか[12)]。

---

12)『ドイツ・イデオロギー』第２巻の「Ⅳ　カール・グリュン『フランスおよびベルギーにおける社会運動（ダルムシュタット，1845年）…』にはまた「フーリエ主義」の項がある。このさい，「サン＝シモン主義」の項との対比上，そこでフーリエがどのように評価されているかを瞥見しておこう。まずマルクスが強調するのはフーリエが社会状態を把握するさい，「生産の変化」から出発しているこ

フーリエへの言及は『資本論』第Ⅰ部がもっとも多いが，第Ⅲ部にもみられる。

まず第Ⅰ部での言及をみると，第３篇第８章第６節「標準労働日獲得のための闘争。法律による労働時間の強制的制限。1833-1864年のイギリスの工場立法」における児童労働のリレー制度にかかわって現われている。

「『現在整備されている工場制度の大きな弊害は』――と1833年６月25日の工場調査委員会中央委員会第一次報告書は述べている――『それが，成人の労働日の最大限の長さにまで児童労働を延長する必要性をつくり出す点にある。成人の労働を制限せずに――これを制限すれば，予防しようとするはずの弊害よりももっと大きな弊害を生み出すであろう――この弊害を矯正する唯一の手段は，二組の児童を使用する案であると思われる』と［『工場調査委員会，王命委員中央委員会第一次報告書。1833年６月28日，下院の命により印刷』，53ページ］。それゆえ，リレー制度（リレーとは，英語でもフランス語でも，別々の駅で郵便馬車の馬を継ぎ替えるという意味である）の名でこの『案』が実施され，その結果，たとえば朝５時半から午後１時半までは９歳ないし13歳の一組の児童が，午後１時半から晩の８時半までは別の一組が継ぎ馬として使われるというふうになった。［…］

このいわゆるリレー制度は，資本の幻想から生まれた子なのであって，労働の魅力が資本の魅力に変わった点をのぞけば，フーリエがその『“各種作業短縮時間参画（„courtes séances”）*1”』のユーモラスなスケッチをもってしても，それにはとうていおよばなかったほどのものであった。

＊１［フーリエ『産業的・協同社会的新世界』田中正人訳『世界の名著』42，中央公論社，501-504ページ。フーリエは，ここで，彼の理想社会では各人が二時間以内の各種の希望の仕事につぎつぎに参加したりそこから離脱したりできるように配置され，労働は楽しみそのものになると述べている］」

とである。

「フーリエがいつでもただ生産の変化からのみ出発していることを，彼（グリュン）はフーリエ自身のもとで見ることができたのである」(③，557ページ)。

そしてそれでもこの観点の卓越性を何ら理解していないグリュンに対し，マルクスは自己のより発展した理論を開示している。

「グリュン氏はさらに，今日ではパンは蒸気製粉機によって生産されるが，以前には風車や水車によって，もっと以前は手挽臼によって生産されたということ，これらの相異なる生産様式はたんにパンを食うこととはまったく独立であり，したがって『すごく生産する』グリュン氏の思いもよらない歴史的な生産の発展が入り込んでくるということ忘れている。これらの相異なる生産段階とともにまた，消費にたいする生産の相異なる関係，両者の相異なる矛盾も与えられているということ，これらの矛盾の理解と解決は，ただ，そのときどきの生産様式とそれに基礎をおいている全社会状態との観察，およびそれらの実践的変更によってのみ得られるということ，これをグリュン氏は感づいていない」(③，562ページ)。

なお，マルクスがフーリエの教育論＝「教育に関するフーリエの詳論」(③，557ページ）をきわめて高く評価していることも付け加えてこう。「この教育論は，現に存在するこの種のもののうち，図抜けて最良のものであって，きわめて独創的な考察を含んでいるものである」(同)。

これらの言及をみるだけでも，マルクスはすでに『ドイツ・イデオロギー』の段階にあってもサン＝シモンとサン＝シモン主義よりフーリエとフーリエ主義により高い評価を与えていたことがうかがい知れよう。

（Ⅰa，482，502–503ページ）。

すなわちマルクスはフーリエのリレー制度＝「各種作業短縮時間参画」には――『産業的・協同社会的新世界』における「ユーモラスなスケッチ」と評しているとはいえ――「労働の魅力」を高める意義を認めてはいるが，資本のもとでのむきだしのリレー制度＝交替労働制は「資本の魅力」を増す以外のものではないというのである。

ついで第４篇第13章第１節「機械の発展」において，交通・輸送手段にかかわる叙述中にフーリエの特有の表現――「回転軸」が借用されている。

「工業と農業の生産方法における変革は，とくに，社会的生産過程の一般的諸条件，すなわち交通・輸送手段における変革をも必要とした。家内的副次工業をもつ小農業と都市の手工業とをその回転軸（ピヴォ）* (Pivot) ――フーリエの言葉を借りると――としていた一社会の交通・輸送手段が，拡大された社会的分業，労働手段および労働者の集中，植民地市場をともなうマニュファクチュア時代の生産諸要求にもはやまったく応じられなくなり，それゆえ，実際にも変革されたのと同じように，マニュファクチュア時代から継承された輸送・交通手段も，まもなく熱病的生産速度，膨大な規模，一つの生産部面から他の生産部面への大量の資本と労働者の絶え間ない投入，新しくつくり出された世界市場の連関をともなう大工業にとっては，やがて耐えがたい束縛に転化した。

＊［フーリエは文明時代を４期に分け，第３期と第４期の『回転軸』を『海洋独占』と『産業的封建制』とした。19世紀はじめの社会を第３期にあるとし，第４期の産業的封建制――これは資本主義を意味する――に進むとした］」（Ⅰb，661–662ページ）。

ここで回転軸（ピヴォ）をなすとされているのは資本主義以前の「家内的副次工業をもつ小農業」と「都市の手工業」であり，それに応ずる交通・輸送手段が資本主義成立期=マニュファクチュア時代の生産諸要求に応じられなくなり変革されたように，マニュファクチュア時代の交通・輸送手段も産業革命以降，大工業にふさわしい交通・輸送手段にとって替わられざるをえなかったというのである。

また同章第４節「工場」においてはフーリエの「緩和された徒刑場」という呼称が資本主義的工場制度の本質を穿った特徴づけとして採用されている。

「工場制度のなかではじめて温室的に成熟した社会的生産手段の節約は，資本の手のなかでは，同時に労働中の労働者の生存諸条件，すなわち空間，空気，光の組織的強奪，また労働者の慰安設備については論外としても，生産過程での人命に危険な，または健康に有害な諸事情に対する人的保護手段の組織的強奪となる。フーリエが工場を『緩和された徒刑場（„gemiederte Bagnas”）*1』と呼んでいるのは，不当であろうか？

＊１［フーリエ『細分された虚偽の産業』第１巻，パリ，1835年，59ページ］（Ⅰb，734–736ページ）[13]。

(13) マルクスはフランス語版でドイツ語第２版第13章第７節「機械経営に伴う労働者の反発と吸引，

さらに第７篇では二つの言及がある。その一つは第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」「第５節　資本主義的蓄積の一般的法則の例証」「c　大ブリテンの農業プロレタリアート」における労働隊制度にかかわってみえる。

「労働隊（Gang）は，10人ないし40，50人の者，すなわち婦人，年少者（13歳ないし18歳）――ただし少年はたいてい13歳になるとやめさせられる――，それに男女の児童（６歳ないし

綿業恐慌」の冒頭部分（ドイツ語エンゲルス版と同じ。社研版では770-771ページ）に若干変更を加えている。

「経済学のまじめな代表者はみな，機械の導入が，機械と競争するマニュファクチュア労働者や手工業者にとっては災禍である，ということを認めている。彼らはほとんどみな，工業労働者の奴隷状態を嘆いている。

だが，それにもかかわらず，彼らの主な論拠は何か？　機械は，その導入期と発展期に伴う災禍がひとたび通り過ぎてしまえば，究極には労働奴隷の数を減少させるのではなく増加させる，ということである！　なるほど，経済学が酔う美酒は次のような博愛の定理である。

すなわち，工場制度とは，多かれ少なかれ急速な過渡的成長期の後ではそれが発端において強制的な休業によって飢えさせた労働者よりも多くの労働者を，その鉄の靸（しびき）のもとに屈服させる，ということなのである。

ガニル氏は例外である。彼の意見によると，機械は終局の結果として賃金労働者の数を減らし，それ以後は，フーリエがあれほど才気煥発にひやかした『完全になることのできる完成能力』を意のままに発展させる『紳士』の数が，賃金労働者の負担で増加することになる。ガニル氏は，資本主義的生産の奥義にほとんど通じていないにしても，はやり次のこと，すなわち，もし機械が就業労働者を機械の導入によって押しつぶすと同時に，機械の発達によって労働奴隷を増やすならば，機械は非常に不吉な物である，ということを感じている。しかし，彼の観点の痴呆症は，彼自身の言葉によってしか表現することができない。

「生産し消費するように宣告された階級が減少し，労働を指揮し全住民を助け慰め啓発する階級が増加し，……労働費用の減少，生産物の豊富，消費財の安価から生じるいっさいの恩恵をわがものにする。こういう方向で，人類は自己を天才の最高の精神的産物に高め，宗教の神秘的な深奥のうちに入りこみ，道徳（それは，いっさいの恩恵をわがものにする等々のことである）の有益な原則を確立し，自由（もちろん，生産するように宣告された階級のための）と権力，服従と正義，義務と人間性を保護する法律を制定する[149]」。

(149) このぞっとするような訳のわからぬ言葉は，C・ガニル氏の『経済学体系』第２版，パリ，1821年，第１巻，224ページに載っている。同書，212ページ，参照」(江夏美千穂・上杉聰彦訳『フランス語版資本論』下巻，85-86ページ)。

つまりフランス語版では第２版（エンゲルス版）の当該箇所を組み替え，① ガニルの見解を示した注（226）のうち第２版の「このたわごと」以下の出所を示す部分を除く先行の文章を本文に格上げし，② 注（226）の彼らの周知の「完成されうる完成能力」を修飾して新たに「フーリエがあれほど才気爆発にひやかした」(raillée avec tant de verve par Fourier) の一句を挿入するという変更がなされている。フランス語版をフランス人読者に近づきやすくする心配りであろう。

なお社研版『資本論』では「＊[フランス語版では「完成されうる完成能力」の語の前に「フーリエがあれほど才気煥発にひやかした」の語句がある。この語は，フーリエの『家庭的農業組合論』，パリ，1822年，および『細分された虚偽の産業』，パリ，1835年，第１巻に頻出する]」（Ｉb，771ページ）と，この変更のことにふれ，あわせて出典を明示している。

13歳）で構成されている。隊を統率するのは労働隊長であって，これはいつも普通の農村労働者であり，たいていいわゆる悪党，極道者で，住所不定の飲んだくれではあるが，一種の企業心と腕のある者である。[…] 借地農場経営者が発見したところでは，婦人は男子の指揮のもとでしか規律正しく労働しないが，婦人と児童はいったん働きだすと――フーリエがすでに知っていたように――まことに猛烈にその生命力を支出するのに，成人男子労働者は非常に狡く，できるだけ生命力の支出を節約しようとする*」（Ⅰb，1185–1186ページ）。

＊ここで使用している社研版『資本論』には注記がないが，MEGAⅡ/6 Apparat S1566およびⅡ/8 Apparat S1311によると，この部分はフーリエ『細分された虚偽の産業』第２巻，1835年，588ページの一節を要約したものである。

みられるように「婦人と児童はいったん働きだすとまことに猛烈にその生命力を支出するのに，成人男子労働者は非常に狡く，できるだけ生命力の支出を節約しようとする」というフーリエの犀利（さいり）な人間観察にマルクスも同感の意を表わしている。

なおこの労働隊の風紀に関してフーリエの「公然交合」という表現が採用されている。

「この制度の『暗い面』は，児童および年少者の過度労働，彼らが日々５，６マイルからときには７マイルも離れた農場へ行き来する途方もなく長い行進，最後には『労働隊』の風紀の乱れである。[…] フーリエが『公然交合』*（Phanerogamie）と呼ぶものが，日常茶飯事である。13，14歳の少女が同世代の男子によって妊娠させられることがしばしばある。

＊［性交にふけって多産なブルジョア的結婚に反対し，自由な恋愛の公然交合こそ理想社会と理想的夫婦生活にふさわしい適正人口を生み出すとされる。フーリエは『産業的・協同社会的新世界』，パリ，1829年，399，504ページ］」（同，1186–1187ページ）。

第Ⅲ部では第６篇「超過利潤の地代への転化」第45章「絶対地代」において文明国においては大きな不耕作地が存在するという指摘が肯定的に引用されている。

「たんなる法律上の土地所有は，所有者のために何らの地代も創造しはしない。けれども，土地所有は，土地が本来の農業に使用されるのであれ，他の生産諸目的，たとえば建築などに使用されるのであれ，所有者に超過分をもたらす土地の価値増殖的利用を経済的諸関係が許すまでは，自分の土地を利用させないでおく権能を土地所有者に与える。彼は，この働き場所の絶対量を増減させることはできないが，しかし市場に存在するその量を増減させることはできる。それゆえ，すでにフーリエが述べたように，どの文明国においても土地の比較的大きな部分がいつでも耕作されないでいるということが特徴的な事実なのである*」（Ⅲb，1326–1327ページ）。

＊社研版『資本論』には注記がないが，MEGAⅡ/15 Apparat S1240によると、この言及は『産業的・協同社会的新世界』パリ，1829年，402ページからのものである。

以上のような引照をみると，マルクスはサン＝シモンよりフーリエに親和的であること，フーリエの鋭い人間観察・文明批評に多大な賛意を現わすとともに想像力に富む，エスプリのき

いたフーリエの言い回しを愛好している様がうかがえる。また主著『産業的・協同社会的新世界』におけるファランステールの形をとる協同社会を排斥しているわけではなく未来社会への予感の提示として受け止めているといえるようである。

[オーギュスト・ブランキ]

オーギュスト・ブランキ[14] については『資本論』第Ⅰ部第３篇第８章第５節「標準労働日の

---

14) 前記「人名索引」でみると，オーギュスト・ブランキへの言及は――ブランキストの呼称を含めると――88件と多い。しかしブランキその人への評価がまずもって問題にすべきだと考えられるので，ここではブランキストへの言及は省略することにしたい。

さてブランキへの言及は『新ライン新聞』1848年７月１日付の「『ケルン新聞』の六月革命論」にフランスにおけるプロレタリアートの史上初の蜂起＝６月蜂起に関連してその名が登場するが，評価そのものは『フランスにおける階級闘争』における以下の叙述に凝縮されている。

「プロレタリアートは，ますます革命的社会主義のまわりに，すなわちブルジョアジー自身がそれにたいしてブランキなる名称を考えだした共産主義の周囲に結集しつつある。この社会主義は，革命の永続宣言であり，階級差異一般の廃止に，階級差異の基礎であるいっさいの生産関係の廃止に，これらの生産関係に照応するいっさいの社会関係の廃止に，そしてこれらの社会関係から生じるいっさいの観念の変革に到達するための必然的な過渡点としてのプロレタリアートの階級的ディクタートゥラである」(⑦，86ページ)。

ここでマルクスは「革命的社会主義」＝「ブランキ」の名を冠する「共産主義」を階級差異一般の廃止＝敵対的「生産関係の廃止」を「必然的な過渡点」としての「プロレタリアートの階級的ディクタートゥラ」によって完遂するものと特徴づけている。この特徴づけ自体はブランキ自身という以上にマルクス自身の特徴づけの色彩が強いが，それはともかくとしてもマルクスはブランキに満腔の敬意を表わしているといえる。

マルクスはブランキの高潔な人格と革命への献身を鑽仰していたところから両者のあいだには心温まる交流・交渉関係が存在していたことがうかがえる。そこでそのいくつかをみておこう。その一つはブランキの名誉をを守るため，1851年２月24日の二月革命１周年を記念する「平等者の宴会」のさい，ブランキが獄中から寄せた「乾杯の辞」にルイ・ブランら臨時政府のメンバーが非難されていたところから主催者のルイ・ブランらがそれを握りつぶしたのに対し，マルクスとエンゲルスはその「乾杯の辞」にまえがきを付し，あいさつ本文をドイツ語と英語に訳し，パンフレットとして刊行している（⑦補録12［L. A. ブランキの乾杯の辞のドイツ語訳へのまえがき］578-580ページ)。

また1861年３月。ルイ・ボナパルトの官憲に不当に逮捕されたブランキにかかわる裁判に際してもフランスの医者・評論家のルイ・ヴァト（ペンネーム――ドノンヴィル）がブランキ擁護の小冊子を発行するさいそれへの財政的援助に奔走し，1861年11月10日付の「マルクスからルイ・ヴァト（在ブリュッセル）へ」の手紙において，以下のようにヴァトを励ましている。

「フランスで，プロレタリアの党のことを頭と心でつねに考えてきた人（ブランキ――引用者）の運命に，私ほど関心をもつものはいないということを確信してください」(㉚，499ページ)。

なお，ブランキは獄外にあったとき1868年９月６日-13日に開かれた第一インターナショナル第３回大会＝ブリュッセル大会に出席しており，このことを1868年９月25日付「マルクスからエンゲルス(在マンチェスター）への手紙で一筆している。「ブランキはブリュッセル大会中はいつも出席していた」(㉜，131ページ)。またブランキはマルクスのプルードン批判の書＝『哲学の貧困』を読んでいてブランキストの友人トリドンらに推奨している。このことをマルクスは1869年３月１日付の「マル

ための闘争。14世紀中葉から17世紀末までの労働日延長のための強制法」においてフランスの12時間法をめぐる闘争に関連して兄――経済学者のジェローム－アドルフ・ブランキに言及したさい，「革命家」との一言のみを付し「革命家ブランキ」の呼称で顧みられている。

「1852年に，ルイ・ボナパルトが，法廷労働日を根底からゆるがすことによってブルジョア的地歩を占めようとしたとき，フランスの労働人民*2は異口同音に叫んだ――『労働日を12時間に短縮する法律は，共和国の立法のうちわれわれに残された唯一の善である！(129)』と。

(129) […] 1850年９月５日のフランスの12時間法は，1848年３月２日の臨時政府の布告のブルジョア的修正版であるが，それはすべての“作業場”に無差別に適用される。この法律以前には，フランスの労働日は無制限であった。それは，工場では14時間，15時間，またそれ以上続いた。『1848年におけるフランスの労働階級について。ブランキ氏著』を見よ。ブランキ

クスからエンゲルス（在マンチェスター）への手紙でＰ・ラファルグの言として以下のように伝えている。

「プルードンに反対した僕の本（『哲学の貧困』――引用者）についてラファルグは，次のように書いている。

『ブランキはその本を１冊持っていて、彼の友人たちのみなにそれを貸しています。たとえば，トリドン*はそれを読んで、どんなにモーロ（マルクス――引用者）がプルードンをやっつけたかを知って喜んでいます。ブランキはあなたにたいしてたいへんな敬意を抱いています。……彼はプルードンのために私の知っているかぎりの最もうまいことばを見つけました。彼はプルードンを湿度計と呼んでいるのです』」(㉜，208-209ページ)。

＊トリドン，エドム-マリ-ギュスタヴ Tridon, Edme-Marie-Gustave（1841-1871）フランスの政治家，政論家，ブランキ派、国際労働者協会員，1871年の国民議会の議員，パリ・コミューン議員，コミューンの鎮圧後ベルギーに亡命した。――㉜「人名索引」

最後にマルクスは『フランスにおける内乱』においてフランス・プロシャ戦争におけるフランス軍の敗北後からパリ・コミューンの壊滅に至るまでの出来事のうち，1870年10月31日の蜂起のさい国民政府がブランキらにいったん誓約した権力移譲の破棄，ダルボア大司教その他大勢の司祭と捕えられていたブランキ一人との捕虜交換のティーエルによる拒絶などを記しブランキの果敢な行動とブルジョアジーの卑劣な挙動とを対比的に描いている。

もっともマルクス，エンゲルスの連名になる『新ライン新聞　政治経済評論』第４号（1850年４月）の書評のうちの「市民コシディエール配下の前警備隊長Ａ．シュニュ著『陰謀家―秘密結社コシディエール配下の警視庁，義勇兵団，パリ，1850年』において二人はすでに近代革命においては職業的陰謀家の暴動戦術は望みのないもので「全プロレタリアートだけが革命を遂行しうる」(⑦，262ページ)という立場からいわゆるブランキズムに批判的であったが，マルクスは『資本論』第Ｉ巻刊行後の1869年の『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』の再版＝第２版において初版＝1852年版における「ブランキとその同志たち，すなわちプロレタリア党の真の指導者たち，革命的共産主義者たち」という表現のうち「革命的共産主義者たち」の一句を削除している（⑧，114ページ。なお村田陽一訳『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』[国民文庫，大月書店] には「附録」に「初版からの削除部分および初版・現行版異同対照表」が付され，165ページで同様の注意がなされている)。

『資本論』第Ｉ巻刊行後のマルクスにあってはブランキの「革命的共産主義」はその理論的解明の点でもはや満足のいくものではなくなっていたということであろうか。

氏――経済学者のブランキのほうであって革命家（Revolutionär）のブランキではない[＊3]――は，政府によって労働者の状態の調査を委嘱されていた。

＊２　[第三版，第四版では『人民』となっている]
＊３　[経済学者のブランキは，革命家のブランキの兄]（Ⅰa，477–478ページ)。

[プルードン]

それでは最後にプルードンに対するマルクスの評価はどうか。フランスにおける先行社会主義思想家への言及のうち，プルードンへの言及回数は『資本論』全３部にわたり最多であるが，その言及はすべて否定的なものである

まず『資本論』第Ⅰ部では第１篇第１章「第３節　価値形態または交換価値」「ｃ　一般的価値形態」「２　相対的価値形態と等価形態との発展関係」における全体的価値形態の一般的価値形態の転化に関連して注（24）で言及されている。

「形態Ⅲが，ついに商品世界に一般的・社会的な相対的価値形態を与えるが，それは，ただひとつの例外をのぞいて商品世界に属するすべての商品が一般的等価形態から排除されているからであり，またその限りでのことである。だから，リンネルというひとつの商品が，他のすべての商品との直接的交換可能性の形態または直接的に社会的な形態にあるのは，他のすべての商品がこの形態にないからであり，またその限りのことである[(24)]。

（24）事実，一般的・直接的交換可能性の形態を見ても，それが一つの対立的商品形態であり，ちょうど，一方の磁極の陽性が他方の磁極の陰性と不可分であるように，非直接的交換可能性の形態と不可分であるということは，決してわからない。そこから，すべての商品に同時に直接的交換可能性の刻印を押すことができるかのような妄想が生じうるが，それはちょうど，すべてのカトリック教徒を教皇にすることができるというのと同じ程度の妄想である。[以上，第２版で追加] 商品生産に人間的自由と個人的独立との“究極”（nec plus ultra）を見る小市民（Kleinbürger）にとっては，この形態に結びついたもろもろの不都合，ことに諸商品の非直接的交換可能性から免れていることは，もちろん非常に望ましいことである。この俗物的ユートピアを描いたものがプルードンの社会主義であり，それは，私が別のところで示したように，決して独創の功績などをもつものではなく，むしろ彼よりずっと昔にグレイ，ブレイ，その他の人びとによってはるかによく展開された。このことは，このような知恵がこんにちでもある種の仲間うちで『“科学”』の名のもとにまかり通ることをさまたげない。プルードン学派ほど『“科学”』という言葉を乱用した学派はかつてなかった。というのも，『概念の欠けているところへうまく言葉がやってくる[＊2]』からである[15)]。

15）江夏美千穂氏は前掲『「資本論」中の引用文献にかんする研究』で「『フランス語版』では（…）おしなべて言えば，プルードン批判が『第２版』に比べてさらに後退している」(191ページ）といわれ，

＊２　[ゲーテ『ファウスト』第一部，『書斎』の場で，学生の質問にたいしてメフィストフェレスが切り返す言葉の，順序が違うだけの言い換え。手塚富雄訳，中公文庫，第一部，139ページ]」（Ⅰa，116–117ページ）。

ここでは「プルードンの社会主義」なるものが「すべての商品に同時に直接的交換可能性の刻印を押すことができるかのような妄想」，一商品だけが直接的交換可能性をもつ一般的価値形態に結びついているもろもろの不都合，「ことに」自らの推奨する商品が「諸商品の非直接的交換可能性から免れ」ていることを望む「俗物的ユートピア」を描いたものにほかならず，それはとりも直さず「商品生産に人間的自由と個人的独立との“究極”を見る小市民」の願望を現わしたものとされる。このようにこの最初の登場でプルードンの社会主義――資本主義を否定しても市場経済＝商品生産・商品流通を存続させる市場社会主義についての基本的性格の規定がなされている。

第１篇ではさらに第２章「交換過程」の冒頭部分における「商品所有者」の措定にかかわっても現われている。

「諸商品は，自分で市場におもむくこともできず，自分で自分たちを交換することもできない。しがたってわれわれは，商品の保護者，すなわち商品所有者たちを探さなければならない。商品は物であり，それゆえ人間にたいして無抵抗である。もしも商品が言うことを聞かなければ，人間は暴力を用いることができる[*1]。言い換えれば，商品をわがものにすることができる。これらの物を商品として互いに関連させるためには，商品の保護者たちは，その意思をこれらの物にやどす諸人格として互いに関連しあわなければならない。それゆえ，一方は他方の同意のもとにのみ，したがってどちらも両者に共通な一つの意思行為を媒介としてのみ，自分の商品を譲渡することによって他人の商品を自分のものにする。だから，彼らは互いに私的所有者として認めあわなければならない。契約をその形式とするこの法的関係（Rechtverhältnis）は，法律的に（legal）発展していてもいなくても経済的関係（ökonomishe Verhältnis）がそこに反映する意思関係（Willensverhältnis）である。この法的関係または意思関係の内容は経済的関係そのものによって与えられている（38）。

(38) プルードンは，まず正義，“永遠の正義”という彼の理想を，商品生産に照応する法的諸

その後退について各引用箇所毎にその変更を手短に指摘されている。そこで，以下では本文および注によってより詳しくそれらの変更を確認しておきたい。

もっとも江夏氏もそれらの変更があったとしてもマルクスのプルードンに対する『資本論』での評価は「ほとんどどこでも否定的である」(同上）という点は変わらないとしている。

フランス語版では，「第２版での追記」の評言のうち「この俗物的ユートピアを描いたものがプルードンの社会主義であり」が削除され，「そのことは」以下のプルードン学説への揶揄――「概念の欠けているところへうまく言葉がやってくる」を含む一連の章句も削除されている。江夏美千穂／上杉聰彦訳『フランス語版資本論』上巻，法政大学出版局，42ページ参照。

関係から汲みとる。ついでに言っておけば，このことによって，商品生産の形態は正義と同じように永遠であるというすべての素町人にとってはなはだ好ましい証明が与えられるというわけである。彼は，こんどは反対に，現実の商品生産とこれに照応する現実の法をこの理想に従って改造しようとする。もしも物質代謝（stoffwechsel）の現実的諸法則を研究してこれらの法則にもとづいて一定の課題を解決するのではなく，『“自然状態”』や『“親和力”』という『永遠の理念』によって物質代謝を改造しようとする化学者がいたとしたら，この化学者をなんと考えたらよいであろうか？　『高利』は『“永遠の正義”』や『“永遠の公正”』や『“永遠の相互扶助”』やその他の『“永遠の真理”』と矛盾すると言うとき，人が『高利』なるものについて知るところは，教父たちが高利は『“永遠の恩寵（おんちょう）”』，『“永遠の信仰”』，『“神の永遠の意志”』と矛盾すると言うときに彼らが高利について知っていたものよりも，はたしてより多いであろうか？[16)]」（Ⅰa，143-144ページ）

ここでは「小市民」の願望を代弁するプルードンの観念論的・規範的方法が批判される。すなわち商品生産に照応する法的諸関係から正義――“永遠の正義”という理想を引き出し，次にこの理想にのっとって現実の商品生産とそれに照応する現実の法を改造しようとする方法――所詮，法的関係から法的関係へとへめぐっているにすぎない方法に対して，マルクスは，「法的関係は法律的に発展していてもいなくても経済的関係がそこに反映する意思関係である。この法的関係または意思関係の内容は経済的関係そのものによって与えられている」と喝破するのである。したがってプルードンは「物質代謝の現実的諸法則を研究してこれらの法則にもとづいて一定の課題を解決する」本来の化学者ではなく，“自然の状態”や“親和力”という「永遠の理念」によって物質代謝を改造しようとする錬金術師的化学者に類比されることにもなる。

資本主義的生産様式が分析される段階に立ち至ると第４篇「相対的剰余価値の生産」第13章「機械と大工業」第４節「工場」においてプルードンの機械論が俎上にのぼされる。

「機械が古い分業体系を技術的にくつがえすとはいえ，さしあたりこの体系は，マニュファクチュアの伝統として慣習的に工場内で存続し，やがて労働力の搾取手段として，資本によっていっそう忌まわしい形態で系統的に再生産されるようになる。部分道具を扱う終生的専門が部分機械に仕える終生的専門になる。機械は，労働者そのものを幼少期から部分機械の部分に転化させるために悪用される[(185)]。

(185) このことから，機械を労働諸手段の総合（synthese）としてでなく，労働者自身のための部分諸労働の総合（synthese）として『構成する』プルードンの途方もない思いつきを評価されたい。[プルードン『経済的諸矛盾の体系，または貧困の哲学』，第１巻，パリ，1846年，

16) フランス語版では冒頭の「プルードン」の名指しが消え「プルードン」が「多くの人びと」に変えられている。前掲江夏／上杉訳『フランス語版資本論』上巻，61-62ページ参照。

135，136，161，164ページ。マルクス『哲学の貧困』邦訳『全集』，第４巻，154-155ページ，参照]」（Ｉｂ，726-727ページ）。

この注（185）は第13章第１節「機械の発展」における「本来的な道具が人間から一つの機構に移されたときから，たんなる道具に代わって機械が現われる」（Ｉｂ，645ページ）という規定にみられる道具と機械の区別も捕足する機械＝労働諸手段のジンテーゼというユニークな把握がみられるが，このジンテーゼ把握は残されているもののフランス語版では新たな変更と追記がなされている。一見，評価が微妙な変更と追記とみなされるので，全文を掲げておこう。

「(102) これによっても機械を労働手段の総合と考えるのではなく，『分業が分割した労働のさまざまな部分を結合するやり方』とみなすプルードンの巧妙な思い付きを，評価することができよう。彼はまた『機械の時代は一つの特殊な性格によって区分される。それは賃金制度である』という物語的でもあり不可思議でもある発見をしている。

Après cela on pourra apprécier I'idée ingénieuse de Proudhon qui voit dans la machine une synthèse non des instruments de travail, mais «une manière de réunir diverses particules du travail, que la division avait séparés». Il fait en outre cette découverte. aussi historique que prodigieuse que «la période des machines se distingue par un caractère particulier, c'est le *salariat*». 江夏美千穂・上杉聰彦『フランス語版資本論』下巻，法政大学出版局，56ページ。ただし訳文は同じではない)。

ここでは見られるように第２版におけるプルードンの思い付きがマルクスの要約から直接引用に変えられ「彼はまた」以下に一文が付け加えられている。

江夏氏は前記『フランス語版資本論』では“idèe Imgènleuse de Phaudhon”を「プルードンの想像力に富む考え方」と訳し“découverte aussi historiqne que prodigiense”を「歴史的でもあり非凡でもある発見」と訳されているが，こうした訳ではマルクスがプルードンの機械論を肯定的に評価しているかにとられかねないが，どうであろうか。

実は，マルクスの２つの直接引用――「分業が分割した労働のさまざまな部分を結合するやり方」と付加された一文――「機械の時代は一つの特殊な性格によって区別される。それは賃金制度である」はマルクスの『哲学の貧困』で引用されているプルードンの『貧困の哲学』からのものであり，引用に際しての論調はけっして肯定的なものではない。いま当該の部分を引用すると，以下の通りである。

「さてこんどは，ブルードン氏の才気あふれる空想のなかでは，物事がどのように経過するかを見ることにしよう。

『社会においては，機械の絶え間ない出現は，労働の反定立，逆公式である。それは細分された殺人的な労働にたいする工業的天才の抗議である。実際に，機械とはなにか？　分業によってばらばらにされていた労働のさまざまな小片をふたたび結合する一つの方法である。どのような機械もみな多数の作業の総括である，と定義することができる。……それゆえ，機械に

よって，労働者の復興がもたらされるであろう。……経済学において分業と矛盾して自己を定立する機械は，人間の精神において分析に対立する総合に相当するのである。……分業は，労働のさまざまな部分をばらばらにしただけであって，各人には，そのもっとも好む特殊作業に専念させていたが，工場は，全体にたいする各部分の関係に従って労働者を結集する。……工場は労働に権威原理を導きいれるのである。……しかし，それだけではない。機械または工場は，労働者に主人を与えることによって労働者を格下げさせたのちに，彼を職人の地位から人足の地位に貶させることによって，その隷従を完了するのである。……目下，われわれが過ごしつつある時代，すなわち機械の時代は，一つの特別な性格によって他の時代から区別される。それは賃金制度である。賃金制度は分業と交換よりも，あとに現われたものである』[第１巻，135ページ，136ページ，161ページ，164ページ]

プルードン氏にひとこと忠告しておこう。各人にそのもっとも好む特殊作業に専念することを許容するところの労働のさまざまな部分の分離，プルードン氏が世界の始めとともに始まったとみなすところの分離は，競争の支配する制度のもとにある近代産業において始めて存在するのである」(④，154～155ページ，傍線は引用者)。

これでわかるように，上記の二つの直接引用は「プルードン氏の才気あふれる空想」のなかでの「物事の経過」を再現したシェーマの一節をなすものであったのである。

したがってここでいわんとしていることは，労働者を「部分機械に仕える終生的専門」者に貶しめる機械の悪用が起こるのも機械が「部分諸労働の総合」ではなく「労働諸手段の総合」であるがゆえのことなのでありその部分機械に仕える終生的専門性は「賃金制度」一般ではなく，それを前提とする「近代産業」――厳密にはマニュファクチュア的分業に起源をもつということをプルードンは御存知ないということであろう。

また第５篇「絶対的および相対的剰余価値の生産」第14章「絶対的および相対的剰余価値」では剰余労働の必要性にかかわって，経済社会構成体の発展史に疎いプルードンの視野狭搾と非歴史性が指摘されている。

「自然的諸条件の恵みは，つねに，剰余労働の，したがって剰余価値または剰余生産物の可能性を与えるにすぎないのであって，その現実性を与えるのでは決してない。労働の自然的諸条件が異なることによって，同じ量の労働が，異なる国々において異なる欲求量を充足するのであり，したがって他の事情が類似していれば，必要労働時間が異なるということになる。[…] 労働者が剰余労働［を提供すること］によってのみ，自分自身の生存のために労働することの許しをあがなう西ヨーロッパ社会のただなかでは，剰余生産物を提供することが人間の労働に固有な性質であると思い込まれやすい(8)。[……] しかしどのような場合でも，彼の剰余生産物が人間の労働に固有の神秘的な性質から生まれるということにはならないであろう。

（８）『あらゆる労働は』（“市民の権利”であり，“義務”であるように見える）『ある超過分を残さなければならない』（プルードン［『経済的諸矛盾の体系，または貧困の哲学』第１巻，パ

リ，1846年，73ページ])[17]」（Ⅰb，877–879ページ）。

すなわち「労働者が剰余労働を提供することによってのみ，自分自身の生存のために労働することの許しをあがなう西ヨーロッパ社会のただなかでは，剰余生産物を提供することが人間の労働に固有な性質である思い込まれやすい」が，この「思い込み」をプルードンは共有しているというのである。したがってプルードンにあっては「剰余生産物が人間の労働に固有の神秘的な性質から生まれる」という蒙昧主義に近づかざるをえないことにもなる。

さらに第７篇第22章「剰余価値の資本への転化」「第１節　拡大された規模での資本主義的生産過程。商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転変」においてもこの「転変」にかかわって「プルードンの狡猾さ」が問題にされている。

「商品生産および商品流通にもとづく取得の法則または私的所有の法則は，明らかに，それ独自の内的で不可避的な弁証法によって，その直接の対立物に転換する。[…] 資本家と労働者のあいだの交換関係は，流通過程に属する外観にすぎないものとなり，内容そのものとは無縁な，内容を神秘化するにすぎないたんなる形式になる。労働力の不断の売買は形式である。内容は，資本家が，絶えず等価なしに取得し，すでに対象化された他人の労働の一部分をより大きな分量の生きた他人の労働と絶えず繰り返し取り替えるということである。所有権は，最初には，自分の労働にもとづくものとして現われた。少なくとも，この仮定が妥当とされなければならなかった。なぜなら，平等な権利をもつ商品所有者だけが相対するのであって，他人の商品を取得するための手段は自分の商品を譲渡することだけであり，そして自分の商品はただ労働によってのみ生産されうるものだからである。所有は，いまや，資本家の側では他人の不払労働またはその生産物を取得する権利として現われ，労働者の側では自分自身の生産物を取得することの不可能性として現われる。所有と労働との分離は，外見上は両者の同一性から生じた一法則の必然的帰結となる。[……]

商品生産がそれ自身の内的諸法則にしたがって資本主義的生産に成長していくのと同じ程度で，商品生産の所有諸法則は資本主義的取得の諸法則に転変する(24)。

(24) それゆえ，人びとはプルードンの狡さ（Pfiffigkeit）に驚くのである。彼は，資本主義的所有に対立させて商品生産の永遠の所有法則を有効だとすることによって，資本主義的所有を廃止しようとする！[18]」（Ⅰb，996–997，1002–1003ページ）。

---

17) フランス語版では同様の内容が「『どの労働も，ある剰余分を残さなければならない』（プルードン）。このことは市民の権利および義務に属するといわれている」（前掲，江夏/上杉訳『フランス語版資本論』下巻，158ページ）と分かち書きされている。

18) フランス語版では注（24）そのものがいったん削除されたのち，注（24）と同様の趣旨の一文が本文にプルードンの名を省いて以下のように記されている。

「商品生産の永遠的法則を資本の制度に適用することによって，その制度を粉砕しうると考える若干の社会主義学派の幻想は，一体なんという幻想だろう！」（前掲江夏／上杉訳『フランス語版資本論』下巻，240ページ）

労働にもとづく所有――「商品生産・商品流通にもとづく取得の法則」＝「私的所有の法則」を前提しても貨幣の資本への転化の繰り返しは単純再生産のもとであろうと拡大再生産のもとであろうと，所有と労働との分離をもたらし，所有は他人の不払労働・不払生産物の取得の権利として現われ，労働は自分自身の生産物を取得することの不可能性として現われる。したがって「商品生産の所有諸法則」は必然的に「資本主義的取得の諸法則」に転変するのに，それでもプルードンは「商品生産の永遠の所有法則」を有効とするのである。したがってプルードンは資本家が絶えず等価なしに他人の労働を取得するという「内容」をみず，等価と等価とが交換される「流通過程の外観」＝「形式」にしがみつき固持し，つねに資本主義的所有――領有法則を生み出す商品生産の所有法則によって「内容」＝資本主義的所有を廃止しようともくろむプルードンの市場社会主義論をマルクスは「狡猾」と呼んでいるといえよう。

『資本論』第Ⅱ部でもプルードンへの言及は止まない。その一つは第３篇第19章「対象についての従来の諸叙述」，第３節「その後の人たち」で，プルードンもスミスのｖ＋ｍドグマを受け入れているばかりか，セーにおけるその俗流化――総生産物と純生産物の抹消，「総価値＝土地所有者と資本家と勤労者との利潤」という三位一体定式の「発見」を自家に帰すその無定見ぶりが摘出されている。

「Ａ・スミスは，彼が商品価値を，したがって社会的年生産物の価値をも労賃と剰余価値とに，したがって単なる収入に分解したことの必然的な帰結――もしそうであれば年生産物は，全部，消費されうるであろうという帰結に反抗した。独創的な思想家たちは，決してばかげた帰結を引き出しはしない。彼らはそれをセーやマカロックの徒にまかせる。

実際，セーは事態をまったく手軽にかたづける。一方の人にとっての資本前貸しは他方の人にとっては収入および純生産物であるか，またはそうであった。総生産物と純生産物との区別は純粋に主観的であり『こうしてすべての生産物の総価値は社会のうちに収入として分配された』(セー『経済学概論』第２巻，1817年，64ページ)。『各生産物の総価値は，その生産に寄与した土地所有者と資本家と勤労者との利潤から構成される』。{労賃がここでは“勤労者の利潤”として現われる！}『その結果，社会の収入は生産された総価値に等しくなるのであって，一派の経済学者たち』{重農主義者たち}『が考えたように土地の純生産物に等しいだけなのではない』(63ページ)。

セーのこの発見を，とりわけプルードンも自分のものであるとした」(Ⅱ，626-627ページ)。

つまりここではスミスはｖ＋ｍドグマを提唱したものの，その「帰結」には抵抗しているが，セーはそこから「ばかげた帰結」を引き出し，それにプルードンが乗ったという道行きが語られている。

もう一つは同篇第20章「単純再生産」第８節「両大部門における不変資本」で，ここではプルードンが経済的形態規定性を理解していない点が指摘されている。

「社会的に考察すれば，社会的労働日のうち，生産諸手段を生産する部分――それゆえ生産

諸手段に新価値をつけ加えるとともに，その生産で消費された生産諸手段の価値を生産諸手段に移転する部分――は，古い生産諸手段の形態で消費された不変資本を，すなわちⅠでもⅡでも消費された不変資本を補塡するものと予定された新たな不変資本のほかには，なにも生産しない。この部分は，生産的消費に帰属すると予定された生産物だけを生産する。したがって，この生産物の全価値は，不変資本として新たに機能しうる価値，不変資本だけをその現物形態で買いもどしうる価値，それゆえ社会的に考察すれば，可変資本にも剰余価値にも分解されない価値にほかならない。――他方，社会的労働日のうち消費諸手段を生産する部分は，社会的な補塡資本のどんな部分も生産しない。この部分は，その現物形態においてⅠおよびⅡの可変資本価値と剰余価値とを実現するものと予定された生産物だけを生産する。

社会的な考察の仕方について語る場合，したがって社会的資本の再生産ならびに個人的消費を含む社会的総生産物を考察する場合，プルードンがブルジョア経済学を模倣したやり方におちいって，資本主義的生産様式の社会は“一括して”すなわち総体として見るときには，それ特有のこの歴史的・経済的性格を失うかのように事態を考察してはならない。その逆である。その場合，問題としなければならないのは総資本家である。総資本は，すべての個別資本家全部の株式資本として現われる。この株式会社は，各人は自分が投入するものは知っているが，自分が引き出すものは知らないという点で，他の多くの株式会社と共通である。」（Ⅱ，697ページ）。

社会的総資本の再生産の「三流れ」――第Ⅰ部門＝生産手段生産部門のｃ（不変資本）の内部補塡，第Ⅱ部門＝生活手段生産部門のｖ＋ｍ（可変資本と剰余価値）の内部補塡，第Ⅰ部門のｖ＋ｍと第Ⅱ部門のｃの相互補塡はいかなる社会でもなされなければならない歴史貫通的な経済原則・法則であるが，それはまた資本主義的生産様式のもとでは標記のようにｃ＝不変資本，ｖ＝可変資本，ｍ＝剰余価値という歴史特殊的な形態規定をまとってしか進行しない。したがって「各人は自分が投入するものは知っているが，自分が引き出すものは知らない」株式会社同様，社会的再生産の法則の貫徹は資本主義のもとでは事前的には（ex ante）は保障されておらず，攪乱，恐慌を通じて事後的に（ex post）しか貫徹されない諸条件であるほかはないのであるが，プルードンは後者，すなわち再生産の「三流れ」が歴史特殊的なものでそれによって措定された諸条件の制約のもとにおかれていることをみないで「ブルジョア経済学を模倣したやり方におちいって」事態の「歴史的・経済的性格」を見失っているというのである。

それではプルードンに言及している回数がもっとも多い『資本論』第Ⅲ部に移ろう。

第Ⅲ部ではまず第１篇「剰余価値の利潤への転化，および剰余価値率の利潤率への転化」第１章「費用価格と利潤」において剰余価値・利潤を不等価交換から導き出し，資本の有機的構成の相違を考慮しないプルードンの不条理＝「学問的大ぼら」が槍玉にあげられている。

「商品の費用価格はその現実的価値を形成するが，剰余価値は商品の価値以上での販売から生じるとし，したがって諸商品の販売価格がその費用価格，すなわち，それらに消費された生

産諸手段の価格プラス労賃に等しければ，諸商品はその価値どおりに売られるとする無思想的観念が，プルードンによって，いつもの学問的といばる大ぼらをもって，社会主義の新たに発見された秘密として吹聴された。諸商品の価値のその費用価格へのこの還元が，実際に彼の人民銀行*の基礎をなす。以前に説明したように，生産物のさまざまな価値構成部分は，生産物そのものの比率的部分で表現できる。たとえば（第Ｉ部第７章第２節［第２版］211ページ．［第３版］203ページ［本訳書第１巻，345-376ページ]），20ポンドの糸の価値が30シリング――すなわち生産諸手段24シリング，労働力３シリング，剰余価値３シリング――であるとすれば，この剰余価値は，生産物の１/10＝２ポンドの糸で表現できる。もし，いま，この20ポンドの糸がその費用価格すなわち27シリングで売られるとすれば，買い手は２ポンドの糸を無償で受け取る。または商品は１/10だけその価値以下で売られる。しかし，労働者は相変わらず彼の剰余労働を行なった――資本主義的糸生産者を儲けさせるためでなく，もっぱら糸の買い手を儲けさせるために。すべての商品がその費用価格で売られる場合には，その結果は，諸商品がすべてその費用価格以上で，しかしその価値どおりに売られる場合と実際には同じであろうと前提することは，まったく誤りであろう。というのは，たとえ労働力の価値，労働日の長さ，および労働の搾取度がどこでも等しいとされても，さまざまな商品種類の価値に含まれる剰余価値の総量は，やはり，それらの商品種類の生産に前貸しされた資本の有機的構成の相違に応じて，まったく不等であるからである。

＊［1849年１月にプルードンが設立した『人民銀行』は，労働時間を記載した紙片を用いて生産物の直接的交換によって貨幣を廃止し，無利子の信用を提供することによって小商品生産者を独立の商品生産者にし，こうして資本を廃止することを目的とするものであった]」(ⅢＡ，66-68ページ)。

したがってここでまずもってプルードンの社会主義的実験であった人民銀行＝交換銀行は商品を費用価格＝ｃ（消費された生産諸手段の価格）＋ｖ（労賃）で売る，失敗するにきまっている「諸商品の価値の費用価格への還元」という「無思想的観念］を基礎とするものであることが明らかにされる。

つぎに第５篇第21章「利子生み資本」においてプルードンの著書『信用の無償性。Ｆ・バスティア氏とプルードン氏との論争』を題材にとり，プルードンが利子に対する道徳的論難とたんなる交換と貸付，したがって貨幣としての貨幣と資本としての貨幣の区別がわからず，利潤の源泉＝「秘密」に通じていないところから資本一般の運動と利子生み資本の運動の相違を知らない「無知」ぶりを数ページを費やして説明されている。

「貨幣資本の役割についてのプルードンの見解は，奇妙なものである*1（『信用の無償性。Ｆ・バスティア氏とプルードン氏との論争』，パリ，1850年)。プルードンには，貸付は，それが販売ではないという理由から邪悪なことに思われる。利子を取っての貸付は『売るものについての所有権を決して譲渡せずに，同じ物品をいつもふたたび販売し，いつもふたたびその代価を受け取る能力である*2』（９ページ)。［貸付の］対象である貨幣，家屋などは，売買の場合

のように，所有者を換えることはしない。しかしプルードンは，貨幣が利子生み資本の形態で手放される場合にはそれに対する何らの等価物も受け取られないということを見ない。どの売買行為においても，およそ交換過程が行なわれる限り，その対象が手放されることはいうまでもない。販売された対象の所有権はつねに譲渡される。しかし価値は手放されない。販売のさいには，商品は手放されるが商品の価値は手放されず，この価値は貨幣の形態で，またはここではただそれの異なる形態にすぎない債務証書もしくは支払請求書としてもどされる。購買のさいには，貨幣は手放されるが貨幣の価値は手放されず，この価値は商品の形態で補塡される。産業資本家は，再生産過程全体を通じて，同じ価値を自己の手中に保持するのであり，ただこの価値の形態が変わるだけである。

＊１［この一文は草稿にはない］

＊２［これはプルードンの信奉者で『ヴォワ・デュ・ププル』紙の編集者の一人，Ch-F・シュヴェ宛の対バスティア論争書簡（1849年10月22日付，第１書簡）の文章であり，前掲『信用の無償性』に掲載された。なおマルクスの同様のプルードン批判については，『経済学批判要綱』，『資本論草稿集』２，大月書店，736ページ以下参照］

交換，すなわち諸対象の交換が行なわれる限りでは，どのような価値変動も起こらない。同じ資本家はいつも同じ価値を手中に保持する。しかし，剰余価値が資本家によって生産される限りでは，なんらの交換も行なわれない。交換が行なわれるときには，剰余価値はすでに諸商品のなかに潜んでいる。個々の交換行為ではなく，資本の総循環Ｇ－Ｗ－G’を考察すれば，つねに，一定の価値額が前貸しされ，この交換額に剰余価値または利潤をプラスしたものが流通から回収される。この過程の媒介は，たんなる交換行為のなかではもちろん見ることができない。そして，貸付貨幣資本家の利子は，まさに資本としてのＧのこの過程に依拠し，まさにこの過程から発生するのである。

『実際,』――とプルードンは言う――『帽子を売る帽子製造業者は……帽子の価値を受け取るのであり，それより多くも少なくも受け取りはしない。しかし，貸付資本家は……彼の資本の全額を受け取るだけではない。彼はその資本よりも多くを，彼が交換に投じるよりも多くを手に入れる。彼は，資本のほかになお利子を受け取る』（［同前］69ページ）。帽子製造業者は，ここでは，貸付資本家に対立して生産資本家を代表している。プルードンが，どのようにして生産資本家は商品を価値どおりに売ることができるのか（生産価格への均等化は，この場合，プルードンの見解にとってはどうでもよいことである），そして，まさにそのことによって，彼が交換に投じる資本を超えて利潤を受け取るのかという秘密を看破していないことは歴然としている。100個の帽子の生産価格が115ポンド・スターリングであり，そして，この生産価格がたまたま帽子の価値に等しく，したがって帽子を生産する資本が社会的平均構成の資本であると仮定しよう。利潤＝15％とすれば，帽子製造業者は，それらの商品をその価値どおりに115ポンド・スターリングで売ることによって，15ポンド・スターリングの利潤を実現する。それらの商品が彼に費やさせる費用は，100ポンド・スターリングにすぎない。もし彼が自分自身

の資本だけで生産したのであれば，彼は超過分15ポンド・スターリングをそっくりポケットに入れる。もし借入資本で生産したのであれば，おそらく彼はそのうちの５ポンド・スターリングを利子として引き渡さなければならないであろう。このことは帽子の価値をなんら変えるものではなく，ただその価値のなかにすでに潜んでいる剰余価値の，さまざまな人物のあいだでの分配を変えるだけである。このように，帽子の価値は利子の支払いによっては影響されないのであるから，プルードンが次のように言うのはばかげている――『商業においては，資本の利子が労働者の賃銀につけ加えられて商品の価格を構成するのであるから，労働者が彼自身の労働の生産物を買いもどすことができるということはありえない。“働きながら生きる*”ということは，利子の支配のもとでは矛盾を含む原理である』([同前] 105ページ)(56)。

(56) プルードンの考えによれば，『一軒の家』，『貨幣』などは，それゆえ『資本』として貸付けられるべきではなく，『原価で…商品』(43，44ページ) として譲渡されるべきである。ルターはプルードンよりはいくらか水準が高い。彼は，金儲けが貸付または購買の形態とはかかわりのないことをすでに知っていた――『高利は取引からも生じる。しかし，いまこれを一口でかたづけてしまうには多すぎる。私たちは，いまは一つだけ，すなわち，貸付における高利についてだけ扱って，これを防止し終えたとき (最後の審判の日ののちに)，取引の高利にたいしてもきびしく説こうと思う』[M・ルター『牧師諸氏に，高利に反対するように説く』，ヴィッテンベルク，1540年．[『ルター著作集』，ヴィッテンベルク，1589年，第６部，307ページ。ヴァイマール版，第51巻，337ページ])。

＊ [1831年11月に蜂起したリヨンの職工の掲げた革命的スローガン『働きながら生きるか，戦いながら死ぬか』のもじり]

プルードンがどんなに資本一般の運動について無理解であったかは，彼が資本一般の運動を，利子生み資本に固有な運動として記述している次の文章に示されている――『利子の蓄積のために，貨幣資本は，交換のたびにいつもその源泉に復帰するのであるから，いつも同じ人の手によってなされる再貸し付けは，いつも同じ人物に利得をもたらすという結果になる』[1849年12月31日付のプルードンの第９書簡，前出，154ページ]。

それでは，利子生み資本に特有な運動において，プルードンにとって依然として説明のつかない点はなんであろうか？　販売，価格，対象の譲渡という諸カテゴリーと，ここで剰余価値が現象する無媒介的形態とである。要するに，ここでは資本が資本として商品になっており，それゆえ，販売が貸付に転化し，価格が利潤の分前に転化しているという現象である」(IIIa，583-586ページ)。

なお，このパラグラフに付された注 (56) によれば，資本一般の運動 (「取引の高利」) と利子生み資本の運動 (「貸付における高利」) との相違を知っていたルターに比べてもプルードンは理論的に低レベルであるといわれている。

同篇ではまた前出のように信用・信用制度についてのプルードンの認識がサン＝シモン主義

者たちの認識にも及ばない点が取り上げられている。

「社会主義的意味での信用制度・銀行制度の奇跡的な力についての諸幻想は，資本主義的生産様式とその諸形態の一つである信用制度とに関する完全な無知から生じる。生産諸手段が資本に転化することをやめるやいなや（このことのうちには私的土地所有の止揚も含まれている），信用そのものはもはや何の意味ももたないのであり，ともかくこのことは，サン＝シモン主義者たちでさえ見抜いていたのである。他方，資本主義的生産様式が存続する限り，その諸形態の一つである利子生み資本も存続し，そして実際上，その信用制度の基盤を形成する。商品生産は存続させておいて貨幣を廃棄しようと欲した同じ人気とりの著述家プルードン(25)だけが，“無償信用”＊2という化物を，すなわちこの小市民的立場の信心深い欲求の実現と称するものを，夢想することができたのである。

＊2［無償信用にかんするプルードンの見解は，『信用の無償性。F・バスティア氏とプルードン氏との論争』，パリ，1850年に述べられている。なお，本訳書第３巻，583-586ページ参照］」（IIIb，1069-1070ページ）。

このように，ここではプルードンの市場社会主義論の一帰結――「無償信用」が「夢想」と断じられている。

ついで第６篇「超過利潤の地代への転化」，第37章「結論」では地代の運動と土地価格の運動の区別，地代の運動に対する土地価格の運動の相対的自立化にかかわって1848年革命時の国民議会におけるティエールの「所有権」演説がプルードンの提案に対する反対演説であったところからその氏名が挙げられている。

「地代そのものを，地代が土地購買者に対してとる利子形態と混同することは――地代の本性に関するまったくの無知にもとづく混同であるが――奇妙きわまる誤った結論に導かざるをえない。すべての古い国では，土地所有はとくに高級な所有形態とされており，そのうえ，土地所有の購入はとくに確実な投資とされているので，地代が買われるさいの基準利子率は，たいてい，比較的長期にわたる他の投資の場合よりも低く，その結果，たとえば土地の購買者は，購買価格に対し，他の投資方法では同じ資本で５％受け取るであろうのに４％しか受け取らないということになる。または，同じことに帰着するが，彼は，他の投資による同じ年々の貨幣所得にたいして支払うであろうよりも多くの資本を地代に対して支払うのである。このことから，ティエール氏［ティエール，ルイ－アドルフ，Thiers, Louis-Adolphe（1797-1877），フランスの政治家，歴史家，オルレアン王家の支持者。大臣を歴任（1832-34），首相（1836，1840），パリ・コミューンの鎮圧を指揮し，第３共和国の大統領となった（1871-1873）］は“所有権”に関するおよそ最悪の彼の論策（1848年にフランス国民会議でプルードンに反対してなされた彼の演説を印刷したもの＊）で地代が低いと結論づけているが，それはただ，地代の購買価格の高いことを証明するにすぎない。

＊［1848年７月26日に，当時，国民議会議員であったプルードンが財務委員会に提出した提案に反対して行なったティエールの演説をさす。この演説は，ベルギーの新聞に連載後，『所有について』（パリ，1848年）として刊行，また『国民会議議事録』第２巻，パリ，1849年，666-671ページに収録された。同年７月31日のプルードンの反論については，マルクス＝エンゲルス「プルードンの反ティエール演説」（邦訳『全集』第５巻，302-306ページ），およびマルクス「P-J・プルードンについて」（邦訳『全集』第16巻，とくに28ページ）参照］」（Ⅲb，1102ページ）。

最後に第７篇「諸収入とその源泉」第49章「生産過程の分析によせて」において三位一体定式――「諸商品の価値は究極的には労賃＋利潤＋地代に分解されうるという根本的に誤ったドグマ」が生じる根拠を述べるとともに，その定式に没入しているといかなる分析上の困難におちいらざるをえないかを明らかにした５つの指摘のうちの最初の指摘においてプルードンが三位一体定式にとらわれているがゆえに発した愚かな決まり文句――“労働者は彼自身の生産物を買い戻すことができない。利子が含まれているがゆえに”という既出の誤りに対するフォルカードの批判と関連して取り上げられている。

「諸商品の価値は究極的には，労賃＋利潤＋地代に分解されうるという根本的に誤ったドグマは，また，消費者が究極においては総生産物の総価値を支払わなければならない*というようにも，あるいはまた生産者たちと消費者たちとのあいだの貨幣流通は究極においては生産者たち自身のあいだの貨幣流通に等しくなければならない（トゥック［『通貨主義の研究』第２版，ロンドン，1844年，36ページ。玉野井芳郎『通貨原理の研究』，世界古典文庫，日本評論社，78-79ページ］）というようにも表現される。これらの諸命題はすべて，それらが依拠する根本命題と同じように誤っている。

これらの誤った“明らかに”不合理な分析にいたらせる諸困難は，要するに次のものである――

（１）不変資本と可変資本との根本関係，したがってまた，剰余価値の本性，それゆえ資本主義的生産様式の全土台が把握されていないということ。資本の各部分生産物の価値すなわち個々の各商品の価値は，不変資本に等しい価値部分，可変資本（労働者たちにとっての労賃に転化する）に等しい価値部分，および剰余価値（のちに利潤と地代とに分かれる）に等しい価値部分を含む。したがって，労働者が彼の賃銀で，資本家が彼の利潤で，土地所有者が彼の地代で，諸商品――そのそれぞれがこれらの構成部分の一つだけでなく，三つの構成部分の全部を含む諸商品――を買うということがどうしてできるのであろうか？　また労賃，利潤，地代の，すなわち，三つの所得源泉を合計したものの価値総額が，これらの所得の受領者たち*1の総消費にはいり込む諸商品，これら三つの価値構成部分のほかになおそれを超過する価値構成部分，すなわち不変資本を含む諸商品をどのようにして買うということができるのであろうか？

彼らは，三つからなる価値で四つからなる価値をどのようにして買うというのであろうか？(53)

(53) プルードンは，このことを把握しえないことを愚かな決まり文句で表明する――“労働者

は彼自身の生産物を買い戻すことはできない”。なぜなら，そのなかには利子が含まれおり，それが“原価”に付け加わるからである，と*2。しかし，ウジェーヌ・フォルカード［Forcade, Eugène（1820–1869）フランスの政治・財政ジャーナリスト。『腕木通信機』等の各種雑誌を創刊・編集，『両世界評論』のコラムニスト］氏はどのようにプルードンの誤りを正しているか？『もしプルードンの異論が正しいとするならば，彼は資本の利潤［原文は『財産の収入』］に打撃を加えるばかりでなく，産業の存在の可能性そのものをも絶滅させることになるであろう。もし労働者が80しか受け取っていないものに100を支払うことを余儀なくされるとすれば，もし賃銀が，ある生産物において，賃銀がそれに投入した価値を買い戻すことができるだけだとすれば，労働者は何も買い戻すことができず，賃銀は何も支払うことができないと言うに等しい。実際には，原価にはつねに労働者の賃銀よりも大きなあるもの，また販売価格には企業家の利潤よりも大きなあるもの――たとえばしばしば外国に支払われた原料の価格――が含まれる。……プルードンは，その仮説において，一つのこと，すなわち国民的資本の絶えざる増大を忘れた。彼は，この増大がすべての勤労者にとって――すべての企業家にとってもすべての労働者にとっても――確かであることを忘れた』（『ルヴュ・デ・ドゥ・モンド』第24巻，1848年，998，999ページ）。ここには，ブルジョア的無思想性の楽天主義がそれにもっともふさわしい知恵の形態をとって現われている。第一に，フォルカード氏は，労働者は彼が生産する価値のほかになおより大きな価値を受け取らなければ生活しえないであろうと信じているが，しかし，もし彼が彼の生産する価値を現実に受け取るとすれば，資本主義的生産様式は逆に不可能となるであろう。第二に，彼は，プルードンが局限された観点のもとでのみ語っている困難を的確に一般化している。商品の価格は，労賃を超える超過分だけでなく，利潤を超える超過分すなわち不変価値部分をも含む。したがってプルードンの理屈によれば，資本家もまた，彼の利潤をもってしては商品を買い戻しえないであろう。では，フォルカードはどのようにしてこの謎を解くのか？　無意味な空文句――資本の増大によってである。したがって資本の恒常的な増大は，とりわけまた，次のこと，すなわち100の一資本の場合には経済学者にとって不可能である商品価格の分析が，1万の一資本家の場合には余分なものになるということのなかでも確かめられることになる。土地生産物は，土地が含むより多くの炭素を含むのはなぜか，という問に対して，それは土地生産が恒常的に増大するからであると答えるような化学者がいるとすれば，人は彼について何と言うであろうか？　ブルジョア的世界のなかにできうる限りの最善の世界*3を発見しようとする好意的善意が，俗流経済学（Vulgärökonomie）においては，真理愛（Wahrheitsliebe）と科学的探究心（Wissenschaftlichen Forschungstrieb）とのあらゆる必要に取って代わるのである。

＊1［『これらの所有の受領者たちの』はエンゲルスの手になる］
＊2［プルードン『所有とはなにか？　または法と統治との原理についての諸研究』，パリ，1841年，201

-202ページ［長谷川進訳『所有とはなにか』，『アナキズム叢書プルードン Ⅲ』，三一書房，206-208ページ］。本訳書第３巻，583-586ページをも参照］

＊３［『この最善の世界においては，万事が最善に仕組まれている』とするライプニッツの予定調和論（ライプニッツ『弁神論』１の８）を反駁するために書かれたヴォルテール『カンディード』，第１，第３，第６，第30章に由来する言葉。吉村正一郎訳，岩波文庫，14，22，35，172ページ参照］」（Ⅲｂ，1480-1483ページ）。

注（53）で問題にされていることは，プルードンにあっては，利子は剰余価値・利潤の分肢形態であって生産物に新たに付加されるものではないことが理解されていないが，「ブルジョア的無思想性の楽天主義がそれにもっともふさわしい知恵の形態をとって現われている」フォルカードにあってはプルードン以上に没理論的な解答を与えているという。すなわち，第一にフォルカードは労働者は彼が生産する価値以上のものを受け取らなければ生活しえないというが，「労働者が生産する価値を現実に受け取る」ということは労働力の価値を超えて剰余価値をも受け取ることであるから逆に資本主義が不可能になることが判っていない。第２にはプルードンはｖ＋ｍのドグマの信奉者であるので，商品の価値のうち，利潤を超える超過分＝不変価値部分がいかにして実現されるか理解していないのであるが，フォルカード自身にしても不変価値部分の実現という「謎」に対して「資本の増大」という「無意味な空文句」をもって解答になっていると思い込んでいる。だが，それは「土地生産物は土地が含むより多くの炭素を含むのはなぜか」という問に対して，それは「土地生産が恒常的に増大するからである」と答える化学者」と同様な珍妙な解答に過ぎない。「フォルカートはプルードンが局限された観点のもとでのみ語っている困難を的確に一般化している」という功はあるものの，その無思想性・無理論性はプルードンを上回っている。というのも「ブルジョア的世界のなかにできうる限りの最善の世界を発見しようとする好意的善意が真理愛と科学的探究心とのあらゆる必要にとって代わっている」俗流経済学には所詮，それ以上のことは期待しえないからである。

ともあれ上来のようにみてくると，『資本論』はまたプルードン理論，とりわけその経済学的迷妄と市場社会主義論批判の書でもあったことを知りうる。

さて，フランスの先行社会主義思想家へのマルクスの言及をわたりみてきたいま，マルクスは彼らの社会主義思想をどのように評価していたとみなしうるであろうか，最後にこの点を中間総括としてまとめて置こう。

まずサン＝シモンとサン＝シモン派の国家社会主義論に関してはサン＝シモンとサン＝シモン派の産業資本家・商業資本家を指す勤労者（travailleur）概念にみられる階級把握の混濁性からしても採るところとはならなかったであろうし，プロレタリアート概念を確立し資本家とプロレタリアートとの対立のうえに提唱されたペクールの国家社会主義論に対しても肯定的言及が不在であったことからすれば，究極の社会経済システムとはみなしていなかったといえる。

またプルードンの市場社会主義論に関していえば，資本主義を否定しても商品生産・商品流通を存続させるというその経済学的基礎把握の根本的難点からしてとうてい是認されうる代物

ではなかったことは明白である。

ただ，フーリエに関してはそのエスプリのきいた表現の好意的多用にみられるように，肯定的であり，ファランステールの協同組合の社会主義への意図に親和的であったといえるように考えられる。

しかし，それにしてもマルクスは誰かの社会主義思想が自己のそれともっとも同質的なものと考えていたであろうか。探訪をさらに続けよう。